慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自治都市トゥールーズにおける上訴制の確立と力ペー朝期親王領政策の諸相 : 上訴裁判権をめぐる執政官府と伯代官の抗争を中心に
Sub Title	L'établissement institutionnel de l'appel à Toulouse sous le règne d'Alphonse de Poitiers et l'application de l'image du rex-dominus des Capétiens
Author	薮本, 将典(Yabumoto, Masanori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2012
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.85, No.4 (2012. 4) ,p.21- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20120428-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自治都市トゥールーズにおける上訴制の確立とカペー朝期親王領政策の諸相

――上訴裁判権をめぐる執政官府と伯代官の抗争を中心に――

薮本将典

一　はじめに
二　前史：トゥールーズにおける「伯代官 vicarius：viguier」の興隆
(一)　中世前期における伯代官の萌芽：メロヴィング朝からカロリング朝まで
(二)　トゥールーズ伯領における伯代官の隆盛：カロリング朝末期からアルビ十字軍まで
三　アルビ十字軍期の自治都市トゥールーズにおける執政官府の興隆
(一)　執政官府と伯との関係のあらまし
(二)　執政官府による立法権の簒奪
(三)　執政官府による裁判権の簒奪
(四)　執政官府による判決の法源性の明確化
四　トゥールーズ伯レモン七世統治下における伯権回復の試み
(一)　第一段階（伯と執政官府の協調期）における伯権回復の試み
(二)　第二段階（伯と執政官府の確執期）における伯権回復の試み
五　王弟アルフォンス統治下のトゥールーズにおける司法改革と執政官府
(一)　一二五五年の危機
(二)　一二六五年の危機
(三)　二つの危機からの帰結
六　総括：王領地における王権理論の適用との比較

㈠「完全なる権力 plena potestas」
㈡「代理 représentation」概念
㈢ 親王領における王権理論の適用

一 はじめに

『ルイ聖王伝』の作者として名高いジャン・ド・ジョワンヴィル[1]が伝えているように、十字軍遠征のため長らく王国を留守にしていたルイ九世が、その不在に乗じて乱れた綱紀（特に司法の退廃）を粛正すべく、帰国直後の一二五四年一二月に司法改革令（大王令）[2]を公布したことは夙に知られている[3]。他方、兄王の忠実な模倣者であり、時のカペー朝王権による親王領政策の手駒として南仏の所領を「フランス化する rendre françaises」ことに尽力したとされるポワトゥー伯アルフォンス[4]が、当王令と相前後して南仏ラングドック所領（＝トゥールーズ伯領）向けに発した同様の司法改革令[5]については、これまで単なる類似性以上の重要性は認められて来なかった。

しかし、あらためて両司法改革令を比較分析すると[6]、王弟アルフォンスの司法改革令には「上訴制の確立」という大きな差異が見られるのであり、通説のごとく彼が王権政策の模倣者であったとするならば、この点にこそ、王弟アルフォンスの積極的な意図ないしは中世ローマ法学における皇帝の絶対的立法権（*Princeps legibus solutus est*：*D.1.3.31* ／ *Quod principi placuit legis habet vigorem*：*D.1.4.1.pr.*）を援用した当時の王権理論との関連性を見出し得るものと考える。他方で、近時フランスの法史家クリネンによって提唱された、盛期中世フランスにおける「立法絶対主義 absolutisme législatif」概念[7]に対しては、歴史の現象面よりも理念モデルに重きを置くものであり、結論を急ぎ過ぎている、との反論があるのも事実であり[8]、特に斯界の泰斗リゴディエールの分析が示すよ

うに、一三世紀フランスにおける右のローマ法文の適用は非常に限られた範囲で、それも極めて形式的に受容されたに過ぎず、さらにその実効性如何については、国王立法をつぶさに検討すべきであるならば[9]、このようなクリネンの分析系は極度に相対化されよう。

そこで以下本稿では、当該上訴制の適用地域たる南仏ラングドック所領の主都であり、歴代のトゥールーズ伯より広汎な特権を認められてきた自治都市トゥールーズの執政官府と伯代官との間の裁判権（裁判先取権・上訴権）をめぐる抗争の歴史を素材として、古典的通説ではローマ法に由来する南仏の地域的特性とされる上訴制[10]をあえて明文化し、これを徹底することによって、執政官府を伯代官に従属させようとする王弟アルフォンスの政策を、クリネンの分析系に従って、時の王権理論の積極適用として位置付けることをその目的としたい。

二　前史：トゥールーズにおける「伯代官 vicarius ; viguier」の興隆

㈠　中世前期における伯代官の萌芽：メロヴィング朝からカロリング朝まで

トゥールーズにおける執政官府と伯代官の裁判権をめぐる抗争の歴史をひもとくには、先ず南仏における伯代官の興隆について概観する必要がある[11]。

1　メロヴィング朝期

九～一一世紀のロワール以南の諸地方においては、「ウィカーリア vicaria」なる語が史料に頻出するが、この語はそもそもカロリング朝期に伯領を意味した「パーグス pagus」の下位区分に対する領域呼称であり、ラングドック地方についてもその用例が確認されている[12]。しかし、この「ウィカーリア」なる語は歴史の過程で徐々に領域的な意味を喪失し、そこから個人の資格呼称としての「ウィカーリウス vicarius」なる語が派生したのであ

るが、こうした変遷の萌芽はメロヴィング朝期ガロ＝ローマ領域の官制を網羅した『官職要覧』における次のような定義に求められる[13]。

・「伯がキウィタスに関する所用で、国王もしくはパトリキウスの元へ伺候するとき、伯の代理をする者、それがウィカーリウスである」（ザンクト＝ガレン写本[14]）

・「伯がキウィタスに関する所用で国王の元に伺候するか、または不在の折にその代理をする者、それがウィカーリウスと称される」（ヴァチカン写本[15]）

これらの定義からは、独自の管轄領域を持たない、伯の単なる下僚・代理役人として官職体系の中に位置付けられる「ウィカーリウス」像が浮かび上がってくるが、翻ってトゥールのグレゴリウスによる『歴史十書』における「裁判権を用いてそのパーグスを統治していた、このウィカーリウス・アニモドゥスの裏切りで……[16]」という記述に目を転じるならば、六世紀末には伯の代理役人として支配すべく、固有の管轄領域に公権力を付与されて派遣された「ウィカーリウス」も存在したことが窺える。

かくして、メロヴィング朝期には、①『官職要覧』タイプ（伯の不在に際して、その代理人としてキウィタス領域全体を統括する）と②『歴史十書』タイプ（キウィタスの下位領域パーグスを恒常的に統治し、伯の支配権を限定された小領域で代行する）の二種類の「ウィカーリウス」が存在しており、さらに「グントラム勅令」（五八五年）における「（伯は）自身に委任された領域について、ウィカーリウスや、いかなる側近も誰であれこれを任命したり、派遣したりしてはならない。さもなければ、彼らは悪しき行いを認めつつ取引したり、誰彼問わず不当な没収をしかねないからである[17]」という規定からは、既に六世紀末の時点で、独自の管轄領域を有する「ウィカーリウス」の存在がかなり一般化していたばかりでなく、公権力を背景とする彼らの職権濫用が深刻な社会不安を醸成していたことが看取される。この「グントラム勅令」は、本来ガロ＝ローマ領域全体にわたる統治の基本方

針を表明したものと解されるが、キウィタス領域が他の地方に比して広大であったロワール以南を効果的に支配するため、伯がその管轄領域全体に「ウィカーリウス」を自らの代理人として分散配置する傾向が強かったことは容易に推定されよう。

さらに、これら「ウィカーリウス」との関連で注意を要するのが、「ユーデクス」judex」なる語である。この語は極めて一般的であるがゆえに、その意味内容は曖昧であり、例えば西ゴート王国における「ユーデクス」は、キングの指摘によれば、「単に裁判官を意味する語以外の何ものでもなかった。」[18] かくして、メロヴィング朝期において何らかの意味で裁判権を掌握し、裁判を主宰する者は、その機能ゆえに「ユーデクス」と形容されたのであり、したがって先に挙げた『歴史十書』において「裁判権を用いて iudecaria potestas」パーグスを支配していたアニモドゥスは、「ウィカーリウス」にして「ユーデクス」と言うことができる。

2　カロリング朝期

このような農村小領域の統括者としての「ウィカーリウス」の権限内容が史料において具体的に言及されるのは、カロリング朝期に入ってからである。例えば、シャルル＝マーニュの勅令では、「ウィカーリウスおよびケンテーナーリウスの面前では、皇帝の巡察使もしくは伯の臨席のない限り、所有財産と自由について判決されたり、審理されたりしてはならない」[19] あるいは「土地財産や人的自由についてはウィカーリウスやケンテーナーリウスの面前で審理されてはならない」[20] 旨が規定されているが、これらは「ウィカーリウス」の権限を消極的に限定しているに過ぎない。この他にも、「ウィカーリウス」への贈物の禁止、違法行為をなす「ウィカーリウス」の更迭命令、「ウィカーリウス」の法の熟知と遵守等が義務付けられている。[21]

かくして、伯の属僚と捉えられるに至ったメロヴィング朝以来の村落裁判主宰者の管轄権能を制限し、彼らから在地の裁判秩序が内包する「古き権利」が剝奪されることによって、従来の裁判主宰者たる「ユーデクス」か

ら、伯の属僚として管轄権を担う「ウィカーリウス」への変容が図られ、ここに後代における、いわゆる「伯代官 vicarius；viguier」が登場した。

㈡ トゥールーズ伯領における伯代官の隆盛：カロリング朝末期からアルビ十字軍まで

以上、メロヴィング朝からカロリング朝に至る伯代官登場の過程を南仏全体にわたって俯瞰して来たが、ここからはトゥールーズ伯領に目を転じ、特にカロリング朝末期からアルビ十字軍に至る、伯代官の隆盛について概観することで、後のトゥールーズ執政官府との裁判権をめぐる抗争の端緒を明らかにしたい。

1 トゥールーズ伯領における「伯代官 viguier」・「副伯 vicomte」の興隆

アルビ十字軍終結後の南仏における北仏カペー朝王権の伸張に関する古典的名著、『ルイ聖王とポワトゥー伯アルフォンス』（一八七〇年）を著したブータリックによれば、非常に古い制度としてカロリング朝期まで伯を代行して来た「伯代官 vicarius；viguier」は、①伯の代理たる *vicarius* と②制度化された権限を担う属僚としての *viguier* の二種を区別すべきであるとする[22]。これは、先に述べた①『官職要覧』型と②『歴史十書』型の二つの類型に対応するものであるが、カロリング朝末期のトゥールーズ伯領においては、「ケンテナーリア」と混同され、伯領の下位行政区分を構成するに至った司法行政管区を担当する「伯代官 viguier」が登場し、管区である「代官区 vigurie」の長として、従来の *vicarius* とは異なる機能を担っていた。つまり、①型（vicarius）が伯の代理として伯と同等の権能を担うのに対し、②型（viguier）は固有の属性権限（特に刑事裁判権）を担っているに過ぎないのである。

かくして、トゥールーズ伯家の前期二家系が抱えていた司法を補佐する「代行官 vicaire；vicarius」を起源とする「伯代官」が第二家系末期に登場するのであるが[23]、本来「伯の派遣代行 missus comitis」であった彼らは、

その多くが自らに委託されていた権力を自身で行使するに至り、官職を封 fief として私有・世襲化し、「副伯 vicomte」を名乗った[24]。ここに、カロリング朝期とは異なる、封建領主たる伯の代行官 lieutenant としての「副伯」が登場し、一〇世紀には伯の大権 regalia を侵奪してトゥールーズ伯からの完全な独立を勝ち得たのみならず、そのうちの幾つかは、トゥールーズ伯に拮抗し得る程の地域権門（例えば、トランカヴェル家、ナルボンヌ副伯、ロートレック副伯、ミネルヴ副伯、ロデーヴ副伯、グレズ副伯、ポリニャック副伯、等）を形成したことは、フリッシュによって「封建時代の南仏ラングドック史における最も際立った事実」と指摘されている[25]。

2　自治都市トゥールーズにおける「伯代官」

このように、トゥールーズ伯領においては、本来伯の代行官として自らに委任された一定の権限を行使すべき「伯代官」の多くが、管区において伯の大権を簒奪して封建領主化し、「副伯」を名乗るに至った一方、伯領の主要都市（トゥールーズ、ニーム、カルカッソンヌ、等）では世襲化に至らず、伯の直接の監督下に置かれていた[26]。

その後一二～一三世紀にかけてのトゥールーズ伯領は、伯の平和維持策の失敗から恒常的な戦争状態に置かれ、転戦を重ねる伯の不在が伯権の弱体化、細分化と分散をもたらし、殊に三度の十字軍遠征に伴う伯の不在は、こうした伯権の衰退を決定づけるものとなった[27]。伯の主要な家臣・副伯・封建領主が伯と共に十字軍に参加した結果、留守居役の代官たちも次々に世襲的な貴族身分を形成し独立するなか、自治都市トゥールーズの代官だけは世襲化されることなく、伯がその任命権を維持し[28]、司法・行政的な権能を有する罷免可能な伯の属僚として、伯の権威を民衆に常に意識させることに寄与した[29]。したがって、これらトゥールーズ伯領における「伯代官 viguier」も、その変遷過程から①「副伯」型（土着化して伯の大権を簒奪し、封建領主として官職を世襲）と②「トゥールーズ代官」型（一定の権限のみ伯を代行し、その限りにおいて伯の属僚にとどまる）に分類され、それぞれ先に述べた①『官職要覧』型と②『歴史十書』型に対応していることが看取される。

トゥールーズ代官区は、一種の裁判官区であり、その範囲はトゥールーズをはじめ周辺領域に及ぶものであったが、この代官の裁判所と並んで自治都市トゥールーズの執政官府裁判所も第一審を構成しており、訴訟当事者は封主たる伯の代官の裁判所と執政官府裁判所のいずれかを選択することができた[30]。この点につきブータリックは、こうした封主の裁判所と執政官府の裁判所の選択権こそが、一二世紀トゥールーズにおける民主政の成果であると評している[31]が、このような自治特権と結びついた形での裁判権の競合は、どのような歴史的展開を見せるのだろうか。以下では、アルビ十字軍期の自治都市トゥールーズにおける執政官府の興隆を軸に、伯代官との裁判権をめぐる抗争の歴史を辿って行きたい。

三　アルビ十字軍期の自治都市トゥールーズにおける執政官府の興隆

㈠　執政官府と伯との関係のあらまし

一二六五年、王弟アルフォンスは自ら、自治都市トゥールーズにおける執政官府の裁判権が伯代官によって不当に奪われている現状を憂慮して、執政官府と伯代官が司法に関して共存すべきことを宣言しており[32]、このことから、王権支配下にあってなお、執政官府と伯代官との裁判権の競合が実際問題としてあったことが窺えるが、このように、執政官府が伯とその代官に対抗し得る自立的勢力となったのは、一二世紀末のことである。一一七六年には、執政官府の名の下に裁判が行われていたことが史料上明らか（AA1/33：「執政官 consul」なる称号の初出[33]）であるが、その後執政官府が伯からの独立を拡大すると共に執政官の役割も明確化し、一一八九年一月に伯と執政官府が諸特権につき協定（AA1/8 et 9）を取り結んで以降、執政官府はその権勢を極めることとなる。

かくして、執政官府は都市住民の代表にして首長となり、封建的な誠実宣誓に基づく拘束によってのみ、伯と

の関係を持つに過ぎない。このような伯への誠実宣誓義務は、新しい執政官の就任時の他、伯の即位時にも課せられ（AA1/10：一一九五年レモン六世／AA1/80：一二二二年レモン七世）、執政官府が伯に誠実宣誓を行う代わりに、伯は執政官府の自由特権諸々を保証する[34]。これにより、伯からの独立を獲得した執政官府は、封建制の階層秩序の中に位置付けられるのである。このように、伯が執政官府を宣誓において公認することは、伯の権威を損なうことなく両者の間に一定の均衡を生み出すという利点があり、これら一連の自治組織の変革は、伯との合意の下で平和裏に進められたと考えられている[35]。

しかし、執政官府はレモン五世統治下の一一八九年には、既に執政官の選任権をめぐって伯の統制からのより一層の離脱を開始しており[36]、一二二三年には、伯位を継承したレモン七世が自らの意思で、伯は貴顕と自治都市の同意がなければ、執政官の選任に関して何ら権利を有していない旨を市民公会の場で厳粛に宣言する（AA1/87）[37]までに至っている。

したがって、一一八九年～一二二九年まで、執政官府を筆頭とする自治都市トゥールーズは、ほぼ完全な自由を獲得して黄金時代を迎え、通説的見解[38]においては、イタリア型「コンタード contado」支配に基づく「トゥールーズ共和国 république toulousaine」とも言うべきものを形作っていたと見なされている。アルビ十字軍による混乱の時代、カペー朝北仏王権の圧力に対する抵抗のほとんど唯一の実質的な中心地となった自治都市トゥールーズは、恐らくは伯の不在に乗じて勢力を拡大し、一二〇九年には“patria Tolosana”と呼ばれる支配領域を確立した[39]。この機に乗じて執政官府も、考え得るすべての特権をトゥールーズ防衛のため伯に要求して領邦君主に肩を並べ、伯の行政官の要職である、伯代官への統制を強めて行き、トゥールーズ市民と伯の他の臣民との間の紛争に際しては、執政官府裁判所が民事・刑事共に上級裁判権を持つべきことを主張するに至ったのである[40]。さらにマンディは、一二一七年～一二二九年を自治都市トゥールーズの政治的・地域的な絶頂期としてとりわけ

重視し[41]、アルビ十字軍がトゥールーズから追われた一二一七年九月の反乱を契機として、翌年に再興された執政官府が[42]、*consul* や *dominus* などの称号を公式に用いて伯に並ぶ君主然として振る舞うようになり[43]、一二二二年九月二二日には、本来伯の大権に属すべき宗教施設、世俗の建造物や公道の保護（＝教会の保護と治安維持）が執政官府に一任されるべきことを伯に認めさせるに至った（AA1/79）[44]として、これを執政官府の隆盛の極みと見ている。

以上が、アルビ十字軍期の自治都市トゥールーズにおける、執政官府の確立と伯との関係の概要であるが、ここからは、中世において密接不可分の関係にあった立法権と裁判権[45]に焦点を当てつつ、より詳細に執政官府と伯との関係の変遷、特に執政官府による伯権簒奪と自治独立の拡大過程について見て行きたい。

㈡　執政官府による立法権の簒奪

そもそも封建的慣習によれば、あらゆる司法行政権力は、その管轄の範囲内において規則や法律を制定することができるが、執政官府も自治特権を拡大するにつれ、徐々に立法権を手中に収めて行った[46]のであり、都市条例はこうした簒奪の諸段階を明確化するものである。そこで、以下ドニョンの分析とリムーザン＝ラモットによる敷衍を通して、これらの段階を確認して行きたい。

1　ドニョンによる分析[47]

一二～一三世紀のトゥールーズの都市条例は、伯から執政官府への主導権の移行をよく示すものであり、以下三つの段階に分けられる。

①伯と市政評議会の賛同による立法：執政官府は諮問機関として参与

②執政官府が市政評議会（執政官府の諮問機関）の場で、伯の賛同（または伯の立会）の下に立法
③執政官府がほとんど常に単独で、市政評議総会（市民公会）の賛同の下に立法：伯の排除

南仏自治都市の執政官政の大半は②の段階にとどまったのに対し、トゥールーズは③の段階まで進んだことで、南仏ラングドック諸都市において際立った存在となっている。

2　リムーザン＝ラモットによる敷衍[48]

リムーザン＝ラモットは、先のドニョンによって示された分析系を以下のように跡づけている。

①伯の承認の下での市政評議会による条例制定
一一五二年の証書（AA1/4 et 5）[49]は、そこに収録された「都市条例 stabilimentum」なるものが自治都市政府の立法を指し示している以上、伯による承認を条件として、執政官府が既に立法権を掌握していたことを示唆している。

②伯による諸権の取り戻しと伯自身による条例制定
しかし、一一八一年～一一八八年にかけて、司教・都市貴族・執政官府に主導された[50]、トゥールーズ伯レモン五世に対する反乱が起き、伯は譲歩を余儀なくされる。一一八一年の証書（AA1/6 et 7）における、伯が執政官府と市政評議会の助言と共に立法した旨の記述は、こうした事情を反映したものである。

③執政官あるいは市政評議会の名の下での法規の公布
一一八九年、先の反乱に勝利し、伯権の打倒に成功した執政官府は、一月付で二つの協定（AA1/8 et 9）を伯と取り結んでいる。この協定は、典型的な領主と臣民の間の封建契約（相互宣誓）の形をとっており、伯が決定的に不利な立場（例えば、今後は司教・二名の貴顕・執政官府が、それまで伯に専属していた刑事裁判権を担うべきこと[51]）に置かれている点に特徴がある[52]。一一九三年三月には、執政官府は *constitutio* と呼ばれる形式で単独立法を行ってお

り（AA1/16）[53]、執政官府による伯の立法権の簒奪は決定的なものとなっている。

3 小括

かくして、執政官府は立法権に関して伯から完全な独立を果たし、その結果、都市条例の制定における伯の臨席（AA1/13）[54]や承認（AA1/75）[55]は、徐々に必須とされなくなっていった。書類上、執政官府の立法に伯が「助言と承認 cum consilio：consensu」を与えている旨の定型句が挿入されるものの、それは、当初立法者と助言者との緊密な関係性を示していた文句が、立法決議の有効性を強めるだけのものとなっているに過ぎない[56]。伯の立法権には、もはや執政官府の提案を拒否するという手段しか残されていないのである。トゥールーズ市古文書館に残されている膨大な都市条例には、自治都市政府の権力組織、治安、都市の維持管理、通商規則、異端の追及、等多岐にわたる内容が含まれており、伯から簒奪された執政官府の立法権に制約は無く、司法・行政のあらゆる事項へと拡大して行ったことが窺える[57]。

㈢ 執政官府による裁判権の簒奪

このように、自治都市トゥールーズにおける執政官府による立法権の独占が進むにつれ、執政官府の裁判権も伸張する様が看取されるのであるが、その推移は概ね以下の通りである。

1 刑事裁判権の簒奪[58]

一一七六年三月の執政官府判決（AA1/33）は、執政官府が伯の承認あるいは立法上の先例から離れて、独自に裁判権を行使した最古の例と目されている。当判決の対象たる姦通は重罪事件であり、重罪事件に対する刑事裁判権は本来伯の大権に属す以上、そもそも執政官府は本件に対する裁判権を有しないが、判決に際して執政官

府は、本件の刑事事件性について言及を避け、加えて当判決が既判力を持つとして[59]、「伯の大権たる刑事裁判権の簒奪」と「執政官府の判決の法源性」を明らかにしている。他方、「彼ら（執政官）は、自身の前に提起された訴えを注意深く聴き、誠実に審理し、正義に従って解決すべく、宣誓による結びつきの下で執政官府として編成された erant constituti capitularii [……] sub vinculo iurisiurandi, ut res communes Tolose urbis et suburbii ante eos delatas diligeter audirent et fideliter consulerent et tractarent et iudiciario ordine diffinirent」との記述からは、執政官府がこうした完全なる裁判権を行使するのはごく最近であったことが窺われる[60]。

したがって、一一七六年以前には、旧来の審判人が執政官府に統合されている一方、一一八〇年一一月の都市の排水をめぐる判例（AA1/19）では、伯代官と執政官府が共同で判決を出していることから、当時執政官府は未だ完全に独立した裁判権を有しておらず、伯代官に陪席判事を提供し続けていたと推定されるが[61]、その後一一八八年には、執政官が欠席の場合に限って、市民や貴顕 prud'homme が裁判に参与しているに過ぎず[62]、翌一一八九年には、判事の称号を持つ者四名が伯代官主宰の「宣誓法廷 curia iurata」を構成し[63]、彼らはいずれも当時の執政官であることから[64]、この時期、伯代官の専任陪席判事としての執政官の地位が確立したと見なされる。

さらに、先に挙げた一一八九年一月の協定（AA1/8）[65]においては、それまで伯の大権に属していた上級裁判権（殺人・放火・農地を荒らす行為・暴力沙汰・騒乱・その他トゥールーズ住民に対するあらゆる加害行為に対する裁判権）が、以後は執政官府に属する旨が伯によって承認されている。当時の上級裁判権の重要性に鑑みれば、執政官府は伯に並ぶ統治権を有していると目されるが、この協定において、伯は執政官府に上級裁判権の独占を認めたわけではなく、あくまで伯との共有を認めたにとどまり、実務上執政官府がこれを独占的に掌握しているに過ぎない[66]。一一九三年三月には、市民の身体・財産に危害を加えた者は、それが正当行為あるいは伯または都市の公戦であった場合を除き、その罪を逃れることはできない旨が執政官府によって立法化（AA1/16）[67]されたが、その

内容は一二〇七年一〇月八日の都市条例（AA1/89）[68]によって敷衍され、最終的には一二〇八年三月一七日の都市条例（AA1/88）[69]によって、執政官府裁判所の管轄権が明確化されるに至った。

かくして、執政官府には全ての刑事訴訟に対する裁判権が認められるに至ったのであるが、これらの事情から、後に執政官府がポワトゥー伯アルフォンスに対し、トゥールーズ市民が関わる刑事事件の裁判権は伯代官には無い旨を主張するに至った[70]ことは、むしろ当然であり、慣習法上正当なる権利として保証を求め得るものであった[71]。このように一三世紀半ばには、伯代官の刑事裁判権が、執政官府によってほぼ完全に抑圧されている状況にあった[72]のであり、理論上伯とその代官が刑事裁判権・上級裁判権を保持しているものの、実質的には執政官府が独占していたのである。

2　民事裁判権の簒奪

民事訴訟において執政官府が裁判を主宰している例は非常に多く、執政官府がトゥールーズにおける民事の通常裁判所となっていたことが窺われる[73]。しかし、訴訟を提起しようとする者は、いつでも伯代官の裁判所に訴え出ることができるのが建前である以上、執政官府は上級裁判権と同様、民事裁判権についても正当にこれを我が物としたわけではない。

執政官府による民事裁判権行使を示す最古の史料である、一一八二年三月のバザークルにある風車小屋をめぐる訴訟の判決（AA1/20）以後、執政官府の裁判所では多数の民事判決が出されているのに対し、伯代官裁判所の民事判決は一一八九年一一月（4G, St. Etienne 227, xxvi DA, 1.17.）[74]を境に一三世紀中頃まで中断しており、したがって、この間は執政官府の裁判所が民事訴訟のほとんど唯一の公共裁判所の役割を果たしていたと推測されている[75]。

3　小括

以上に鑑みれば、アルビ十字軍期のトゥールーズ司法史は、伯と伯代官の権力の衰退によって特徴づけられるものであり、結果として執政官府による民事・刑事両裁判権の統括をもたらしたと言えよう。一三世紀中葉を通じて、ポワトゥー伯アルフォンスの統治下で伯権が刷新された際にも、伯は執政官府裁判所に民事訴訟・刑事訴訟が共に係属することを認めざるを得ない状況にあり[76]、こうした伝統が強固に息づいていたことが窺われる。

㈣ 執政官府による判決の法源性の明確化

こうした伯代官の裁判権の衰退と執政官府の裁判権の隆盛は、先に見たアルビ十字軍期トゥールーズの政治的特殊性もさることながら、裁判所の機構自体に起因するところが大きい。これまでに挙げた伯代官裁判所の判決は、いずれも代官と執政官府が共同して処断したものであるが[77]、ここでの伯代官は、単に裁判を主宰し、所定の形式手続きが守られているかを監督するのみで、判決形成に関わる発言権は有せず、自らの法律顧問による判決を読み上げるだけの存在である[78]。このように、裁判を主宰する者が実際の審理や判決の形成に加わらないという実務は、南北フランスの領邦君主の法廷では珍しくなく[79]、このことが「執政官府と伯代官との裁判権の共同行使」から「執政官府による裁判権の単独行使」に至る裁判権の簒奪を可能ならしめた要因と考えられる。

加えて、フランク古来の同輩裁判制に関する法諺「被告と同等の者によってしか裁かれない」が適用されていたことは、トゥールーズにおける執政官府の隆盛を考えるうえで大きな重要性を持つ。一一八九年一月の協定（AA1/8 et 9）に見られるように、伯とトゥールーズ市民の関係は、互いに「良き封主」・「良き臣民」たるべきことを誓う封建契約に基づく関係であるのに対し、執政官府とトゥールーズ市民の関係においては、執政官府は市民を体現するものであり、執政官府と市民との間に理論上対立は存在せず、互いに拘束し合う契約関係はない。したがって、執政官府が「市民の同輩」として市民の間の紛争を優先的に扱う裁判所を構えるべきは、同輩裁判

制の建前から当然の帰結となり、ここから裁判における「素人主義」が導かれた[80]。後の執政官府による伯権侵害に関する王弟アルフォンスの覚書（一二五五年一二月頃）によれば、トゥールーズにおいては職務宣誓した裁判官が、時に「靴屋や毛皮職人」あるいは「一般人や無学の人」であったとされ[81]、こうした素人主義の一端を窺い知ることができる。

かくして、裁判において伯代官にほぼ完全に取って代わるようになった執政官府は、一二〇四年頃の執政官府令[82]によって、他の裁判権保有者（伯代官・大修道院長・封建領主、等）の裁判権行使を以下のように厳しく統制するに至っている[83]。

①これらの裁判権保有者の判事の間で、慣習法その他の事項につき、見解の不一致ないし疑義が持ち上がった場合には、「騎士（上層市民）の中の執政官 consules cabaleriorum」たる「貴顕 probi homines」の裁定を仰ぐべきこと
②当該判事あるいは訴訟当事者が貴顕による裁定を望まない場合には、トゥールーズ執政官府に判断を委ねるべきこと
③以上に違反した判事には罰金および法曹界からの追放をもって臨む他、トゥールーズ執政官府の裁定に従わない者にも罰金が科される

これらの内容に鑑みれば、後々起り得る問題を避けるのに最も簡便な方策は、最初から執政官府の裁定を仰ぐことであるのは明白であり、ここに終審としての執政官府裁判所の権威、即ち執政官府による判決の法源性が明確化されたと言えよう。このような執政官府による判決の法源性については、一一九六年一一月四日のサン＝セルナン副司教の判決において、判断の基礎となる法令あるいは都市の共通慣習法につき、裁判官の間に意見の不一致が見られる際には執政官府が介入する旨が示されており[84]、一一九〇年代には既に、他の裁判権保有者の裁定

や仲裁に先立って、執政官府の判断を仰ぐべしとの統制が加えられていたと考えられる。

かくして、裁判権の保有者たる執政官府は慣習法を確定する完全なる権力を有し[85]、それまで伯の特権であった、判決を立法化することが執政官府の実務として定着したが[86]、いわゆる上訴裁判権をも掌握するには至っていない。判決に際して執政官府裁判所が、これを終審として申し渡す旨を表明することが後に判決文の常套句として定着していること[87]から、上訴制の観念は、トゥールーズにおいて未だ知られていないことが窺われるのであるが、執政官府のこうした権利が、後の上訴制の問題につながることは確かである。

四　トゥールーズ伯レモン七世統治下における伯権回復の試み

アルビ十字軍期トゥールーズにおける執政官政に関するリムーザン＝ラモットの分析によれば、トゥールーズ伯家最後の当主レモン七世統治下における伯と自治都市政府の関係は、完全に異なる次の二つの段階に分けられる[88]。

【第一段階】：伯と執政官府の協調
執政官は伯の親任であるが、人民の要請に基づくものであり、両者は親密な関係にある

【第二段階】：伯と執政官府の確執
主に執政官の選任をめぐって、伯と執政官府が上位権を争う

以下では、このリムーザン＝ラモットの分析系に依拠しつつ、レモン七世統治下（特にアルビ十字軍終結後）に

見られる伯権回復の試みと、これに対するトゥールーズ執政官府の対応の変化を跡づけて行くこととする。

㈠ 第一段階（伯と執政官府の協調期）における伯権回復の試み

一二二九年の「パリ和約」締結によるアルビ十字軍の終結後、トゥールーズ伯レモン七世は、これまで執政官府に簒奪されて来た伯権の回復に着手する[89]。自身の権威の拡張に熱心である伯は、都市における *populares*（中流以下の市民）と *probi homines*（上層富裕市民）の階級闘争を煽り、その混乱に乗じて自治特権（特に執政官選任権）への介入の度合いを強めたのであり[90]、したがって王弟アルフォンスの到来以降、北仏王権によってトゥールーズの自由が奪われたとする、通説的見解は妥当しない。パリ和約の不利な条件をはねつけ、王権から歴代トゥールーズ伯が享受して来た自由を確保し、南仏の独立を維持するためには、所領内の脱中央集権化傾向を押しとどめ、自治都市や小領主が持つ伝統的な自由特権を弱め、伯に権力を集中させる必要があったのである[91]。

一方、アルビ十字軍期に都市の政局を主導したトゥールーズの人民は、パリ和約以降、急進的な新興富裕層に代え、より古い家柄で穏健な思想を持つ人々を執政官に据えていたが、一二三〇年代にパリ和約に基づく異端審問の嵐が吹き荒れると、これらの指導者層は往々にして異端に深く傾倒していたために、執政官府は伯との共闘に代えて政治的自由の譲歩を余儀なくされた。さらに、伯代官デュラン・ド・サンクト＝ベルシオによる苛烈な異端狩りは、執政官府と伯代官との間の長年の力関係を逆転させ、これを機に、レモン七世は執政官府への支配を強めつつ、アルビ十字軍期にほとんど執政官府に従属する官職となっていた伯代官に対する執政官府の統制の排除に踏み切ったのである[92]。

かくして、レモン七世は、貴顕と自治都市全体の同意なしに、伯は執政官の選任権を有しないと宣言していた（AA1/87）[93]にもかかわらず、パリ和約後に自ら執政官を選任し、主都トゥールーズの中央集権化を推進していた

ことは、後にフィリップ三世の命により行われた、トゥールーズにおける執政官の選任方法に関する査問（一二七四年）における証言[94]からも明らかである。

㈡ 第二段階（伯と執政官府の確執期）における伯権回復の試み

かくして、レモン七世が執政官府への統制を強めるにつれ、伯と執政官府との間の当初の協調関係が執政官の選任権をめぐる権力抗争に変容し、さらに伯が一時この抗争に敗北を喫したことは、一二四八年一月二五日の伯宣言（AA1/103）によって明らかである。この宣言においてレモン七世は、執政官府は自治都市政体たるトゥールーズ市の所有物であり、当市政体のみが「旧市街と新市街の執政官を選挙し・選任し・指名し・創設し・変更し・人員を削減し・補充し・維持する」権利を有している旨を表明し、これまで伯が執政官の選任に統制を加えて来たのは、あくまで執政官府による特別の付託に基づいた、かつ市民がそれを望む限りでの暫定措置であり、伯自身のためではなかった旨を認めさせられており[95]、ここに執政官の選任権に対する伯の統制は、完全に失われたように見える。しかし、一二四九年には伯が再び執政官府の統制に乗り出しており、執政官を自ら選任して伯の名の下に裁判を行うよう命じているばかりでなく[96]、トゥールーズに伯の裁判所を設置しており、これがポワトゥー伯アルフォンスの統治下にも引き継がれた[97]。

以上、一連の経緯からは、自治都市トゥールーズの裁判権が伯の側からの確定的な委譲の対象となったことはなく、執政官によって申し渡された判決の執行権についても、伯に帰属していたと目されている[98]。当時の裁判権は、支配の最も重要な表象であり、伯の大権に属するものであったため、自由特権として執政官府が主張する際にも、それは伯からの包括的・明示的な認可によるものではなく、慣習法上のものに過ぎなかった[99]。既述のように、不在領主としての歴代のトゥールーズ伯には、主都の自治特権拡張阻止にかまけている暇がなく、さらにア

ルビ十字軍という深刻な政治的危機を前にして、主都を預かる執政官府との間にある種の信頼に基づく協調関係を築く必要があったため、伯権の簒奪がいわば黙認されて来たとも言えよう。そのため、トゥールーズの執政官府には伯から簒奪した諸特権を明記した憲法的文書が存在せず、後に王弟アルフォンスが執政官府に対する抑圧を強めた際には、この点が攻撃されることとなる。(100)

五　王弟アルフォンス統治下のトゥールーズにおける司法改革と執政官府

一二四九年九月にトゥールーズ伯レモン七世が歿すると、民衆は反乱を起こし、生前伯によって選任された執政官は任期半ばで職を追われ、ここに執政官府の統制を通じた伯権回復の試みは、潰えることとなった。かくして、いみじくもリムーザン＝ラモットが指摘しているように(101)、シモン・ド・モンフォールやレモン七世統治下での動揺を除き、トゥールーズ執政官府は一一八九年～一二四八年まで、概して司法・立法・行政・軍事・財政における独立した権限行使を維持し続けたと言えよう。

その後、一二二九年の「パリ和約」に基づいて、トゥールーズ伯領の新たな支配者となったポワトゥー伯アルフォンスも、王の弟かつ側近として北仏（主としてパリ近郊）に常住する不在領主であったため(102)、伯の代行官とトゥールーズ住民との間で自治特権をめぐる抗争が激化し、トゥールーズ執政官府が伯の代行官による自治特権の侵害（特に伯代官と執政官府の裁判権の競合）を伯に陳情するに至る。これに対し伯は執政官府宛に書状（日付なし）を発し、執政官府と伯代官の間の裁判権の行使をめぐる争いについては、伯代官が伯の許可なくこれに変更を加えることを禁じ、その調停役たる伯の巡察使の派遣を約しており(103)、この巡察使による報告が、後に伯が兄王に倣った司法改革令（一二五四年頃）を発する際、トゥールーズにおける上訴制を整備する契機となった(104)。

しかし、執政官府の判決を伯代官の上訴裁判権に服せしめる伯の方策は、歴代の伯より自治特権を認められ、都市において伯と同等の権威を自負する執政官府にとって、到底承服できないものであり、ここに、執政官府と伯代官の上位権をめぐる熾烈な抗争が幕を開ける。かくして、一三世紀に典型的な司法改革の名の下に繰り広げられたこの抗争は、一二五五年と一二六五年に頂点を迎えるのであるが、以下では、自治都市トゥールーズにとっての政体上の危機とも言える、これら二つの時期を中心に、執政官府と伯代官ぞれぞれの裁判権をめぐる浮沈の軌跡を辿って行きたい。

㈠　一二五五年の危機

既述のように、一二五四年の伯の司法改革令における、執政官府の判決を伯代官に従属させる試みは、トゥールーズの自治と激しく対立するものであったため[105]、早くも翌年の六月には、決定的な衝突の端緒が見られる。

1　一二五五年六月（抗争の発端）

・ポワトゥー伯アルフォンスは司法改革を推進すべく巡察使（パリ聖堂参事会員ギョーム・ロランと騎士フィリップ・ドボンヌ）をトゥールーズに派遣、衡平に反し伯権を害すると認められる諸事実につき改善を求め[106]、さもなくば納得の行く回答を求める覚書を執政官府に伝達。

・これに対し執政官府は、指摘された事実のごく一部を認めるにとどまり、大部分はトゥールーズ古来の自由特権や慣習法に基づくものであると反論[107]。

・伯の巡察使は執政官府との長い審議の末、正当なものと主張された慣習法を検分すべく、覚書の各条項に執政官府の回答を付した書面を作成し、これを巡察使と執政官府の双方が選任した調停役（トゥールーズ司教、シカール・アラ

マン、ポオンス・アストー、その他）に吟味してもらうよう、執政官府に提案。[108]

・一二五五年六月三日、執政官府がこの提案を拒絶し、伯が次にトゥールーズを訪れた際、直に慣習法の承認と自治特権の拡充を求める旨が市民公会の場で表明される。[109]

モリニエの分析によれば、慣習法・自治特権をめぐる以上の応酬には、伯巡察使の巧みな戦略が見られる。[110] 執政官府が主張する事項は、その大半が度重なる領主権簒奪の帰結に他ならず、公正証書のような確固たる証拠が存在しないという状況にあって、執政官府がその正当性を固持するためには、あくまで慣習法としての正当性に固執して伯巡察使の提案を拒絶しつつ、伯への直訴を持ちだす他なかったと言えよう。

2　一二五五年一二月（本格的抗争）

かくして、巡察使よりトゥールーズでの顛末につき報告を受けた王弟アルフォンスは、これに大いなる不満を抱き、自身の顧問官（法学者）達に「トゥールーズ執政官府による伯権侵害に関する覚書 Hec sunt capitula, in quibus consules Tholosani injuriantur domino comiti」[111] を作成させており、主として次のような、執政官府と伯代官の裁判管轄をめぐる問題が取り上げられている。

・執政官府は、トゥールーズ市民が関わるあらゆる犯罪についての裁判権を主張しており、伯領全土にわたる執政官府の裁判管轄を主張して、伯の総代官を無視している。[112]

・トゥールーズにおいて伯代官に訴えが提起された場合、当事者の双方または一方は、伯代官あるいはその裁判官の許可なしに、さらに伯による明示の禁止に反して、野卑で無学な者を裁判官として選任している。[113]

・トゥールーズ市民が関わる事案について、執政官府はトゥールーズの弁護人に伯代官の裁判所に提訴すること、および外国人に自らの職務を委託することを禁じている。[114]

・執政官府はトゥールーズ内外での犯罪につき、伯代官が証人尋問を行うことを禁止し、さらに伯代官立ち会いの下に聴取され、公正証書となった供述調書を考慮していない。[115]
・執政官府は、伯の裁判権に属すべき刑事事件の証人尋問に、伯代官が立ち会うことを望まない。[116]
・執政官府は、伯に上訴する正当事由を持つ者の権利を侵害している。[117]

以上の条項は、その多くが一二五五年一二月一二日付で執政官府に宛てた伯の書状[118]に収録されているが、その内容は以前に増して苛烈かつ威圧的である。この書状において王弟アルフォンスは、良き慣習法はこれを維持し、悪しき慣習法はこれを改廃すべきとして、これまで何度も執政官府に悪しき慣習法の修正を求めてきたが、その都度拒否されてきた旨を指摘し、かくなる上は、伯が固有の権限に基づいてそれらに修正を加える他ないと宣告したうえで[119]、先の司法改革令における上訴制に関する規定の遵守が義務付けられた[120]。さらに、先代の伯レモン七世がその死に際して有していた、あるいはほぼ手中に収めていた、絶対的な執政官選任権の返還が要求され[121]、伯がトゥールーズ執政官府を通じて市民に声明を通達する伝統についても、これは執政官府が伯の声明を横取りするものであり、勝手な解釈を加えることで伯を市民から遠ざけていると批判された[122]。

(二) 一二六五年の危機

このように苛烈で威圧的な伯の要求に対して有効な抵抗の術を持たない執政官府は、一時的にせよ、これに従う他なかったと考えられ、かくして、自治都市トゥールーズにおける執政官府の裁判権の優越性（訴訟の独占）をめぐる抗争は、一二五五年に一応の解決を見る。しかし、長年伯と同等の権威を恣にして来た執政官府に、いつまでも伯代官の権威の下に甘んじるつもりはなく、こうした反抗の火種は一〇年の時を経て、再び燃え上がる

こととなった。

1　執政官府の反撃

一二六五年頃、トゥールーズ執政官府は二名の代表（デュラン・ド・サン＝バルシオ、アルノー・デカルク）を伯の元に派遣して「トゥールーズ市民の諸条項 articuli civium Tholosanorum」なる要望書[123]を提出、ポワトゥー伯アルフォンスがトゥールーズ伯領を受け継いだ際にトゥールーズの慣習法を包括的に承認したことに言及したうえで、全一二項目の慣習を列挙して確認を求めており、ここでは以下の四項目が重要である。

(1)　トゥールーズの全市民は執政官の選任権を、また執政官は任期満了に際して後継候補者を指名する権利を、それぞれ有して来た[124]。

(2)　伯代官は就任に際して、執政官府に対し、①執政官府への助力と助言、②トゥールーズ全住民の保護、③執政官の建言を聴き入れるべきこと、④トゥールーズ住民の身体・財産に対するあらゆる損害を補償すべきこと、を宣誓した市民であり、かの者が市民を害した場合には、執政官府の手で裁かれて来た（＝執政官府が伯代官の上位者である）[125]。

(3)　執政官府はトゥールーズ市民が関わる刑事事件を全て担当して来た[126]。

(4)　執政官府は慣習法の解釈権を有し、疑義のある場合にこれを裁定できるということは、執政官の就任宣誓の文句からして明白である[127]。

以上の項目は、いずれも、自治都市トゥールーズにおいては、執政官府が市民の代表であり、伯代官の上位者として、伯に並ぶ権威を有するということを根拠付けようとするものである。

2　伯による応酬

執政官府からの要望書を受け取った王弟アルフォンスは、自らの顧問会議に吟味を委ね、それぞれの項目につ

き回答を与えており[128]、先の四項目に対する回答は以下の通りである。

(1) 一二四九年の執政官の例に鑑みれば、先代の伯であるレモン七世が、その死に際して執政官の選任権を行使していたことは明らかである。しかし、レモン七世の訃報に接したトゥールーズ市民が、六ヶ月の任期を残していたこれらの執政官を解任して以来、伯の正当な権利たる執政官選任権が不当に奪われているのであり、この件については、「国王陛下と伯閣下の命により、ラヴールにおいて現教皇たるギー・フーコワ殿によってなされた命令に通りに」解決されるべきである[129]。また、自らの執政官選任権を正当化すべく、執政官府が持ちだしているレモン七世の公正証書(AA1/103)については、伯の印璽を欠いているため、その有効性は疑わしい[130]。

(2) 顧問官ギー・フーコワは、この宣誓の慣行をアルビ十字軍期に遡るものと是認したうえで、伯代官がこのような宣誓を行うことを伯が認めているのは、「伯の宥恕による de patiencia domini comitis」とする。伯代官は執政官府裁判所の判決に対する上訴を担当する以上、執政官の上位者であり、したがってトゥールーズ市民が関わる事案について、執政官府が弁護人に伯代官裁判所に提訴することを禁じているのは、「先に挙げた命令、およびそれにつき現教皇たるギー・フーコワ殿とその他の親任官によって作成された、伯閣下の開封状に反する。」(=一二五五年一二月一二日付の伯の書状と司法改革令を援用[131])

(3) これも、「伯の宥恕による」ものであり、執政官府による権限濫用が目立つ場合には、伯は執政官府の裁判所と伯代官の裁判所のどちらかの選択権を当事者に認めるものである[132]。

(4) 慣習法に疑義のある場合、これを明らかにすべくこれを個別審議の対象とするのは執政官府であるが、内容を吟味するのは伯の役割である[133]。

これら執政官府への回答に続けて、伯顧問会議は要望書の内容を踏まえた「伯令 ordinatio」の草案を付しており、それによると、執政官府はトゥールーズ住民間の訴訟に関して慣習法の解釈権を有するが、刑事事件にお

いては、当事者は執政官府と伯代官のいずれかの裁判所を選択することができる。

㈢ 二つの危機からの帰結

以上、二つの危機を通して執政官府の裁判権が、伯代官の裁判権と併存する形で、伯によって承認されたことは、一見すると執政官府が伯代官に勝利したようにも映ずるが、あくまで「伯の宥恕による de patientia domini comitis」との留保付であり、これにより、執政官府は伯の司法改革令によって導入された上訴制機構に決定的に組み入れられたという点で、勝者はむしろ伯代官であったと言えよう。

このように、トゥールーズ伯領における「最高の裁判官」としての役割を重視した、ポワトゥー伯アルフォンスによる一連の司法改革[134]は、レモン七世統治下での抗争を引き継いだものであり、その多くが一二三〇年以前に実務として定着した、執政官府の司法・行政に関する慣習法が攻撃されている[135]。実際、トゥールーズ伯領の統治に際しては、レモン七世の旧臣（特に、ギー・フーコワ、ポンス・アストー、シカール・アラマン[136]）を重用していることからも、王弟アルフォンスが、レモン七世による中央集権化を礎に伯の権威の再興を目指していたことは明らかであろう[137]。

かくして、執政官府の統制を免れた官職保有者のヒエラルキーの構築を第一義とする王弟アルフォンスにとって、上訴制の導入によって伯代官の権威を高めつつ、執政官府を伯の統制下に置くことは、司法改革の主眼のひとつであった。ここに、兄王の単なる模倣者にとどまらない、王弟アルフォンスの自発性と独創性が見られるばかりでなく、以下に掲げる史料からは、自治都市トゥールーズにおける上訴制が確たる実効性をもって機能していたと見られ、その行政手腕の驚くべき精妙さも併せて窺い知ることができる[138]。

既に一二五七年一月三一日付の異端審問官レノー・ド・シャルトルによる伯宛書簡には、持ち込まれる訴訟の

増大を反映した、伯代官の裁判所に常設された裁判官（後の「専任判事 judex oridinarius」）の存在が窺われ[139]、さらに一二六八年初頭に伯の元に派遣された「トゥールーズ人民の代表団 procuratores communitatio populiarium Tholose」提出の要望書[140]には、伯の元に持ち込まれた上訴を遅滞なく処理するため、トゥールーズ一帯を管区として常駐する上訴判事を創設すべきこと[141]が含まれている。このような、司法における伯・伯代官の権威の上昇は、同時代の法律家エムリ・ド・ルビアの証言（H9/2）[142]からも明らかであり、それによると、王弟アルフォンス統治下のトゥールーズ執政官は、伯代官とその属僚によって選任され、単に伯の属僚として職務を遂行していたに過ぎず[143]、伯代官あるいはその専任判事の法廷に召喚されていた[144]とされ、これらの信憑性については、一二六四年頃のポンス・アストーの覚書[145]における、ウダール・ド・ポンパーニュが伯代官に就任した一二五三年以降、伯代官による執政官府への就任宣誓が廃止されていた旨の記述[146]によって裏付けられる。

かくして、一二七〇年代には、富裕層に属する未亡人マテヴァ某が、自らの権利が認められない場合には、伯代官あるいは国王に上訴すると言って執政官府を脅している判例[147]からも分かるように、トゥールーズ市民は執政官府の裁判所から伯代官の裁判所へ積極的に上訴するようになっており、司法における執政官府の権威の失墜は既に決定的となっていた[148]。かつて執政官府に主導された自治都市トゥールーズは、もはや死に体と言ってよく、後にフィリップ三世が王状（一二八三年）において「（トゥールーズの）執政官達は、朕の名の下に裁判を行っている」と述べているような[149]、「臣従都市 bonne ville」という新たな存在へと変容しつつあることが窺える。

六　総括：王領地における王権理論の適用との比較

このような旧体制下での「臣従都市」への布石となる、ポワトゥー伯アルフォンスによる上訴制の整備・確立

は、ブータリックの分析によれば、兄王に倣った領内の中央集権化により、伯の属僚や都市の特権階級の横暴が取り払われ、市民一般の自由が確保された結果、そうした市民が伯を頼ることがあまりに多くなったため、これを制限してヒエラルキーを確保することが迫られるほどであった、という状況に求められる。[150] ここで、マンディが指摘しているように、王弟アルフォンスが北仏の中央集権的領邦君主の典型として、レモン七世と同様に自治都市トゥールーズの都市国家然とした振る舞いに敵対的であり、尚かつそうした自身の思惑を実行に移すだけの地位に恵まれていたとするならば、[151] それは具体的にはどのようなものであろうか。

そのひとつとして、先代のトゥールーズ伯レモン七世による中央集権化と伯権回復の試みがあることは、先に述べた通りであるが、以下では、中世フランス王権理論に関するクリネンの所説における「完全なる権力 plena potestas」と「代理 représentation」概念に依拠しつつ、王領地における王権理論の適用との比較において、最終的に王弟アルフォンスによる上訴制を時の王権理論の枠組みの中に位置付けることとしたい。

(一) 「完全なる権力 plena potestas」[152]

クリネンによれば、中世における絶対主義の典型表現である「完全なる権力 plena potestas」ないし「権力の完全性 plenitudo potestatis」なる語は、王弟アルフォンスの司法改革令の模範と目される、ルイ九世の司法改革令（一二五四年）が初出とされる。[153]

そもそも、この語は教会法学者によって教皇の「絶対権 potestas absoluta」の意で用いられていたものであり、「神の代理人 vicarius Dei」・「地上の神 Deus in terris」として「キリストがなし得ること全て omnia que potest Christus」を行う教皇は、中世における権力と法の混合体としての「絶対権」を持つことを示していた。一一九八年、教皇インノケンティウス三世が聖職禄授与に関して「朕の完全なる権力に従い、朕は法に基づいて de

jure、法を超える supra ius 出費を認めることができる」（X.38.4）[154]と定めて以来、ローマ法学者にも、この「完全なる権力」なる語が浸透したとされるが、教令における「完全なる権力に基づいて de plenitudine potestatis」なる表現の体系的使用は、教皇インノケンティウス四世をもって、その嚆矢とされる。カンティーニの所説[155]に従い、伝統的な両剣論における教皇と皇帝の並立を説く教会法学者フグッチョの弟子であり、師の見解を引き継ぐインノケンティウス三世と、一三世紀最高の教会法学者のひとりであり、教皇至上主義を強化し、教会法を通じてその思想を現実化しようとしたインノケンティウス四世の政策の間には、その本質において連続性が見られるとするならば、こうした教令における「完全なる権力」の体系的使用は、教会法学における「権力の完全性」概念の確立を示すものであると言えよう。

かくして、ワットが指摘しているように[156]、同時代の教会法学者としてインノケンティウス四世の理論的支柱となっていた、急進的教皇至上主義者ホスティエンシスの『教令大全 Summa Decretorum』（一二五三年頃）における、「権力の完全性が全てを補完する plenitudo potestatis omnia supplet」という観念[157]こそ、古来の実務に反する司法・行政上の措置を正当化する「完全なる権力」の指導理念であったのであり、既に一三世紀の教会においては、「法の上に立つ supra ius」存在である教皇が慣習法や法律による制約から解放されており、ここに、インノケンティウス四世をして、「万人の専任判事 iudex ordinarius omnium」を自任するに至った経緯を窺い知ることができる。

他方、中世ローマ法学における立法者たるローマ皇帝の絶対権（*Princeps legibus solutus est*：D.1.3.31 ／ *Quod principi placuit legis habet vigorem*：D.1.4.1.pr.）[158]を援用しつつ、王国内の中央集権化を推進していたフランス王権も、教皇を真似て「完全なる権力」を用いることができる（＝「キリストの似姿 imago Christi」たる「国王―皇帝 rex-dominus」像の適用）と考えるに至っていたことは、教皇庁と国王尚書局での公文書式の類似からも明らかで

ある。先に挙げたルイ九世の司法改革令の文言は、フランス王権理論における、これら教会法学とローマ法学の影響を端的に示すもの[159]であるが、既述のように王弟アルフォンスが、兄王の司法改革に倣いつつ、トゥールーズ伯領における「最高の裁判官」たる伯を頂点とする上訴制を整備した背景には、このような王権理論の適用があったものと考えられる。

(二)「代理 représentation」概念[160]

中世フランスにおいては、国王や領邦君主をはじめ大小様々な統治権者が、自らの権限を代理する代行官を介して統治を行っていたことは、自治都市トゥールーズをめぐる以上の例からも明らかである。興隆目覚ましいルイ九世下のカペー朝王権が、その支配権力を正当化する王権理論を浸透させる際にも、これら代行官が大きな役割を果たしたことは疑い得ないが、ここでの「代理する représenter」という基礎用語が法律上の概念となり、「代理 représentation」なる概念が教会や形成過程の国家、都市やその他の「団体 universitas」の統治行政や管理運営の一般的な技術として幅広く用いられるようになるのは、一三世紀以降のことに過ぎない[161]。したがって、時のカペー朝王権は、比較的新しい統治技法を用いて王権理論の適用を拡充して行ったものと考えられる[162]。

一三世紀フランスにおける、このような代官制の隆盛に伴い、管区に常駐するようになった地方官（代官・司法代官・国王の代訴官や弁護士・徴税官、等）は、在地の封建勢力からの圧力にさらされることとなった。彼ら国王の属僚による「職権濫用 abus」が告発され、反発を受けるという形で、国王の「至高権 souveraineté」の適用が、在地封建勢力の「自由 libertés」や「特権 privilèges」に邪魔立てされたのである[163]。しかし、少なくともルイ九世の時代には、聖俗封建領主の一部は、国王の総代官 bailli による監視・統制を受け、法や王令の名の下に厳しく糾弾されており、もはや所領の真の主でなくなっていたことは、同時代の逸名詩人の詩篇からも看取さ

れ、このように封建的自由を奪われた王国は、もはや「麗しきフランス douce France」の名に値せず、「奴隷の国 le païs aus sougiez」・「卑劣なる地 une terre acuvertie」であると詠われている[164]。

王領地でのこうした状況に関しては、ルイ九世に献呈された『王侯教育論 Eruditio regum et principum』と題するギベール・ド・トゥルネの論文[165]においても、教会裁判所に取って代わる、国王の裁判官に対する教会人の反感という形で、以下の諸点が挙げられている（ii.15：「人民が良き法を侵害されることによって生じている国内の諸悪について de malis quae fiunt in civitatibus, cum populus abutitur acceptis legibus」）[166]。

・国王の属僚は誰一人として法律を遵守せず、慣習法を廃している。
・国王の属僚は自らの意向を押し付け、その判決は買収されており、無実の者を有罪としている。
・彼らによる抑圧・不正・暴力は、無軌道な徴発・金銭欲と共に、完全なる権力を有するとの確信に帰せられる。

これら、本来は正義を行うことを通常任務とする国王の属僚が、国王の権威を笠に着て法律を曲げ、慣習法に反する悪逆・横暴を国王に進言する際、ギベールは、初期註釈学派の熱心な読者であったソールズベリのジョンの『ポリクラティクス』[167]において危険視された、皇帝の絶対権に関するローマ法文（D.1.3.31）を引用している。しかし、「君主が法の拘束から免れていると言われるのは、かの者に不正なことが許されているからではなく、かの者が罰を恐れることなく、正義を愛し衡平に心を砕く者でなければならないからであり、公益を希求し、自らの意思よりも他人の利益を何より優先する者でなければならないからである」という『ポリクラティクス』の一節[168]は、内容的には、「法に拘束されることが君主の威厳に相応しい」とする *digna vox*（C.1.14.4）[169]に近く、ギベール自身はこの『ポリクラティクス』を下地としたドミニコ会士ヴァンサン・ド・ボーヴェによる『学問鑑

Speculum doctrinale』（lib.VII, cap.23.）[170]の記述に依拠していることが窺える。[171]そこでは、君主の権威を振りかざし、横暴と腐敗を極めるという国王の属僚の悪弊一般が列挙され、こうした傾向は「すべて王国内に満ち溢れている Haec autem omnia in principem redundant」としたうえで、『ポリクラティクス』の一節が引用されており、[172]ギベールの記述はさらにこれを具体的に敷衍したものであると言えよう。

これら、国王に近しい者たちによる記述からは、王領内の司法行政を担う国王代行官の多くが、ローマ皇帝の絶対権に関する法格言や、曖昧で摑みどころのない「国王大権 maiestas regia」によって衝き動かされており、クリネンが指摘するように、北仏の王領地において「物申す者は、皇帝に楯突く者である Qui talia profert aut asserit, caesari contradicit」[173]との実態が看取される。一三世紀という、権力分立の概念とは無縁の時代にあって、政治権力が司法権能と競合している中、カペー朝の諸王にとっては、支配領域に新たな支配権の確立と平和をもたらそうとする意思を代理する裁判所を設置することが不可欠であったのであり、ここに、王権の復興目覚ましいフランス王国における「国家の正義：国家による裁判 justice d'État」の胎動を感知できよう。

かくして、ルイ九世の下で総代官（baillis ; sénéchaux）の数が増大し、管区の主都において定期的に法廷を開くことで、いわゆる国家による裁判が創始されると、伝統的な裁判管轄（教会裁判権・封建領主裁判権・自治都市裁判権）は縮減され、それまで曖昧だった「正す者たる国王 roi justicier」というキリスト教的理想[174]を現実のものとすることに大きく寄与した。このように、「あらゆる正義は国王より発する toute justice émane du roi」という法格言は、一三世紀において単に理論上のものではなく、既述のように、国王に近しい者たちが不平を書き連ねる程の実効性をもって機能していたと言えよう。

㈢ 親王領における王権理論の適用

以上、クリネンの分析系に基づいて、王領地における王権理論の適用のあらましを見て来たが、翻って親王領たる王弟アルフォンスの所領、就中トゥールーズ伯領において、これらの照応関係を見出すことは可能であろうか。

カペー朝王権下での親王領政策に関するウッドの分析によれば、親王領においては先ず、親王の生まれの高貴さが強調され、所領において特異な封建的地位を占めることが確認された[175]。これは一二世紀末以降、「領主のなかの領主 seigneur des seigneurs」・「超越的領主 seigneur par-dessus」・「最高封主 souverain fieffeux」たるフランス国王が、何人に対しても自身で臣従礼を行うことがない[176]のと同様に、親王も所領において国王以外に臣従礼を行うことを拒絶するものである。実際、王弟アルフォンスも「フランス国王の息子」と称し、定紋はフランス王家のユリ紋と摂政母后の出身地カスティリアの城を併せたものを用いる[177]など、その出自の高貴さを強調しつつ、一二五一年六月八日には、モントーバンにおいて、トゥールーズ伯の総代官が臣従礼を行うことを条件に、ファンジョー城について伯自らが臣従礼を行うことを免除する旨の協定をトゥールーズ司教との間で取り結んでいる[178]。

このように、親王が所領において国王の似姿を演じること（生まれの高貴さの強調と臣従拒否）により、領民は王権が既にそこに存在していることを認識し、親王やその属僚の内に王を想起することにつながったが[179]、特に親王による王令の自発的な模倣は、当時の王権によるこうした親王領政策のありようを強く示唆するものである。現存する王弟アルフォンスの文書群には、国王のモデルに沿うように立法しようとする傾向が特に顕著であり、「［……］同司教区において、余の最愛なる兄たるフランス国王陛下が、同様の事案に際して遵守されておられるところに従って[180]」あるいは「［……］フランス国王陛下の属僚が、それらの土地で同様の事案に際して行っていることに従って[181]」といった文言からは、「疑わしい時は、王を真似ろ When in doubt, imitate the king」という

統治の指針が垣間見える。[182] 所領における縁戚関係（地縁）がまったくない、いわば「他所者」であった、王弟アルフォンスをはじめとするカペー朝期の親王たちにとって、在地の伝統の上に地歩を築くのが困難であったことは容易に想像され、その所領においては国王に適合的であることが、より安全で安易な道であった。「フランス国王の息子」からの「国王を真似ろ」という命令は、それを忠実に実行することが、当該命令の淵源たる国王に忠実であるということを必然的に暗示するのであり、親王領における第一世代・第二世代が、一三世紀の段階で国王を一族の長・最有力の構成員として、その主導権を受け入れるということは、むしろ当然であったと言えよう。[183]

かくして、王弟アルフォンスの司法改革令は、このようなカペー朝王権下での親王領政策の一環として位置付けられるものであり、そこでの上訴制の整備・確立こそ、トゥールーズ伯領における王権理論の積極適用として理解すべきものと言えよう。主都トゥールーズの執政官府を伯代官の権威の下に置こうとする中央集権化の試みは、先代のトゥールーズ伯レモン七世から引き継いだものであったが、領内における「最高の裁判官」たる伯を頂点に司法のヒエラルキーを整理し、障碍となる諸特権は悪しき慣習法として積極的に排除して抜本的改革を立法によって徹底すると共に、伯の権限を代理する代官を通じて執政官府に統制を加える王弟アルフォンスの姿は、まさに王領地に王権理論を適用する国王の姿に他ならないのである。

（1） シャンパーニュ伯の総代官 sénéchal を務め、第七回十字軍遠征に際しては、主君に代わって軍勢を率いた。そのため、ジャン・ド・ジョワンヴィルはルイ九世の陪臣に当たるが、豪放磊落な人柄を買われて直臣扱いとなり、後に王の側近くで見聞きした事績を年代記としてまとめた（ジャン・ド・ジョワンヴィル『聖王ルイ　西欧十字軍とモンゴル帝国』伊藤敏樹　訳、ちくま学芸文庫、二〇〇六年、一五頁）。

（2） Devic et Vaissette, *Histoire générale de Languedoc* (éd. Privat) [*HGL*], t.VIII, Toulouse, 1879, cc.1345-1352.

（3） « Après ce que li roys Loys fu revenus d'outre-mer en France, il se contint si devotement envers Nostre-Signour, et si droiturièrement envers ses sougiez ; si regarda et apensa que mout estoit belle chose et bonne d'amender le royaume de France. Premièrement establi un general establissement sus les ougiez par tout le royaume de France... » : M. N. de Wailly (éd.), *Histoire de Saint Louis par Jean sire de Joinville*, Paris, 1868, §CXL, p.249.

（4） E. Boutaric, *Saint Louis et Alfonse de Poitiers : étude sur la réunion des provinces du Midi et de l'ouest à la couronne et sur les origines de la centralisation administrative d'après des documents inédits*, Paris, 1870 [Boutaric ①], pp.6-7 ; Ch. T. Wood, *The French apanages and the Capetian monarchy 1224-1328*, Harvard University Press, 1966, pp.72, 92, 96 et 98.

（5） *HGL*, t.VIII, cc.1352-1356.

（6） 両司法改革令の比較分析については、拙稿「〝立法者 législateur〟と〝正す者 justicier〟：盛期中世フランスにおける上訴制と王権―ルイ九世とポワトゥー伯アルフォンスの司法改革令を中心に―」『法学研究』第八四巻十号、二一五～六四頁を参照。

（7） J. Krynen, *L'empire du roi : Idées et croyances politiques en France, XIII^e^-XV^e^ siècle*, Gallimard, Paris, 1993. [Krynen ①]

（8） J. Chiffoleau, Saint Louis, Frédéric II et les constructions institutionnelles du XIII^e^ siècle, *Médiévales*, 34 (1998), p.19 ; J. Le Goff, *Saint Louis*, Gallimard, 1996, p.675, n.2 ; J.-M. Carbasse, Le roi législateur : théorie et pratique, *Droits*, 38 (2003), pp.3-19.

（9） A. Rigaudière, *Princeps legibus solutus est* (Dig. I,3,31) et *Quod principi placuit legis habet vigorem* (Dig. I,4,1 et Inst. I,2,6) à travers trois coutumiers du XIII^e^ siècle, in *Hommages à Gérard Boulvert,* Paris, 1987, p.444.

（10） Ad. Tardif, *La procédure civile et criminelle aux XIII^e^ et XIV^e^ siècles*, Paris, 1885, pp.128-132 ; Boutaric ①, p.370.

（11） 以下の記述は、佐藤彰一「フランク時代のウィカーリウスとウィカーリア」『ポスト・ローマ期フランク史の研

究』岩波書店、二〇〇〇年、一七一―一九〇頁所収、に依拠している。

（12） *HGL*, t.XII, pp.194-197.

（13） G. Baesecke, “De gradus Romanorum” in *Kritische Beiträge zur Geschichte des Mittelalters: Festschrift für Robert Holtzmann zum sehzigsten Geburtstag*, Berlin, 1933, pp.2-3.

（14） « Uicarius, qui uice comitis uel quando comis pergit pro neccessaris ciuitatis aue ad regem siue patricium, [……] id est uicari. »

（15） « Uicarius qui quando comes ad regem wadit ad causas ciuitatis sue discutiendas, uicem ipsius tenet, et ideo uicarius nominatur. »

（16） « hoc Animodi vicarii dolo, qui pagum illum judicaria regbat potestate, fuisse... » : Gregorii episcopi Turonensis Historiarum libri X, lib.X, c.5, in *Monumenta Germaniae Scriptores rerum Merovingicarum*, t.1, pars.1, fasc.1, Hannoverae, 1951, p.487.

（17） « Non vicarios aut quoscunque de latere suo per regionem sibi commissam instituere vel destinare praesumant, qui quod absitt malis operibus consentiendo venalitatem exerceant, aut iniqua quibuscumque spolia inferre praesumannt » : Guntchramni regis edctum, in *Monumenta Germaniae Legum Sectio II. Capitularia Regum Francorum*, t.1, Hannoverae, 1883, p.12.

（18） P. D. King, *Law and Society in the Visigothic Kingdom*, Cambridge, 1972, p.80.

（19） « Ut ante vicarium et centenarium de proprietate aut libertate iudicium non terminetur aut adquiratur, nisi semper in praesentia missorum imperialium aut in praesentia comitum » : Capitularia missorum Aquisgranense pririmum. a.810, c.3, in *Monumenta Germaniae Legum Sectio II. op.cit.*, p.153.

（20） « De res et mancipia, ut ante vicariis et centenariis non conquirantur » : Capitularia missorum Aquisgranense secundum. a.810, c.15, in *ibid.*, p.154.

（21） « Ut liberi homines nullum obsequium cimitibus faciant nec vicariis neque in prato neque in messe neque in aratua aut vinea et coniectum ullum vel residuum eis resolvant, excepto servitio quod ad regem pertinet et ad

haribannitores vel his qui legationem ducunt. Ut ubicumque inveniuntur vicarii aliquid mali consentientes vel facientes, ipsos eicere et meliores ponere iubemus. Ut comites et vicarii eorum legem sciant, ut ante eos iniuste neminem quis iudicare possit vel ipsam legem mutare »：Capitularia omnibus cognita facienda a.810-804 (801-806), in *ibid*., p.144.

（22） Boutaric ①, p.158.

（23） G. Catel, *Histoire des comtes de Toulouse*, Toulouse, 1623, p.36 ; *HGL*, t.VI, p.934.

（24） E. Boutaric, Organisation judiciaire du Languedoc au Moyen Age, *BEC*, 4e série, t.1 et 2, Paris, 1855-1856 [Boutaric ②], pp.205-206.

（25） A. Fliche, L'état toulousain, in F. Lot et R. Fawtier (dir.), *Histoire des institutions françaises au Moyen Age*, t.I, Paris, PUF, 1957, pp.74-75.

（26） Boutaric ①, p.158.

（27） A. Fliche, *art.cit*., pp.79-81.

（28） 例えば、一一四三年四月付のレモン七世による伯代官の選任：*HGL*, t.VIII, cc.1123-1124. この例からは、トゥールーズ伯家最後の当主が晩年に至るまで、代官の選任権を保持していたことが窺える。

（29） A. Fliche, *art.cit*., p.85.

（30） A. Molinier, Étude sur l'administration de Louis IX et d'Alfonse de Poitiers (1226-1271), *HGL*, t.VII, n.LIX [Molinier ①], p.521.

（31） Boutaric ②, p.220.

（32） « quod in voluntate coaquerentium sit conqueri vicario vel consulibus Tolosanis »：G. Catel, *op.cit*., p.382.

（33） R. Limouzin-Lamothe, *La commune de Toulouse et les sources de son histoire (1120-1249)*, Toulouse-Paris, 1932, p.134 ; 以下、トゥールーズ市古文書館所蔵の証書の摘示に際しては、E. Roschach, *Inventaire des Archives communales antérieures à 1790*, t.1, Toulouse, 1891. における整理番号に従う。

（34） 例えば、一一九五年の誠実宣誓（AA1/10）に際して、執政官府は自らの諸権利を留保しつつ、レモン六世に対

して忠誠を誓っている（juraverunt domino Raimundo, comiti Tolose, vitam et membra et fidelitatem et Tolosam scilicet civitatem et suburbium et honorem, salvis et retentis omnibus eorum juribus et consuetudinibus et usibus et afranquimentis...）が、これに対しレモン六世は自身を信用しても良い旨を宣誓し、伯の父や祖父が執政官府に付与したあらゆる自由特権を是認し公認している（juravit omnibus hominibus et feminis urbis Tolose et suburbii presentibus et futuris, quod in eo credere et confidere se possint, sicut in eorum bono domino. Preterea predictus dominus comes laudavit et concessit et confirmavit... omnia illa afranquimenta et stabilimenta que dominus Raimundus, suus pater, et Ildefonsus, suus avus, eis et eorum antecessoribus dederant et concesserant...）。

（35） A. Fliche, *art.cit.*, p.87.

（36） J. H. Mundy, *Society and government at Toulouse in the age of the Cathars*, PIMS, Tronto, 1997 [Mundy ①], p.88.

（37） « dominus Ramundus [……] comes Tolose [……] sua spontanea voluntate, dixit et recognovit et concessit quod ipse nec sui successores non debebant in hac villa Tolose eligere consules nec usu vel consuetudine neque aliqua antiquitate preteriti temporis, sibi in hac villa Tolose eligere consules minime pertinebat nec pertinere debebat, nisi ex voluntate proborum hominum et universitatis urbis Tholose et suburbii illud evenerit [……] in presentia et in audientia tocius illius populi qui ibi erat congregatus [……] anno M°CC°XX°III° ab incarnatione Domini »；この伯による宣言には、前もって伯と執政官府の間で取り交わされた誠実宣誓（AA1/80）が存在する。

（38） Ph. Wolff (dir.), *Histoire de Toulouse*, Toulouse, 1974, pp.100-116；Mundy ①, pp.250-256. こうした通説的見解に対する近時の有力な反論については、図師宣忠「中世盛期トゥールーズにおけるカルチュレールの編纂と都市の法文化」『史林』九〇巻二号、四二～四八頁、を参照。

（39） 一二三〇年一一月、「トゥールーズ司教区全体における」債務弁済に際しての土地と財産を扱う裁判所が、「神の恩寵によりトゥールーズ伯たるレモン卿」によって創設された旨の記述（« ante presentiam virorum curia super honoribus assignandis statua scilicet NN, qui a viris de alia curia a venerabili domino R. dei gratia comite Tolosano statuta, erat super honoribus et debitis et baratis et obliis assignandis in toto episcopatu Tolosano judices

constituti »：4G, St. Etienne 227, xxvi, DA, 2, 47, cité par J. H. Mundy, *Liberty and political power in Toulouse: 1050-1230*, Columbia University Press, 1954 [Mundy ②], p.136.）が見られ、ここから"patria Tolosana"の範囲は、ほぼトゥールーズ司教区に該当するものと考えられる。

（40） Mundy ①, pp.234 et 237.

（41） Mundy ②, p.88.

（42） シモン・ド・モンフォール統治下での執政官府存続の有無については、後にフィリップ三世の命で行われた、トゥールーズにおける執政官選任方法に関する査問（一二七四年：*HGL*, t.X, pp.162-168.）における証言に齟齬が見られるが、リムーザン＝ラモットはこれらの証言を総合したうえで、この時期トゥールーズ執政官府は存続したものの、その司法的属性については縮減されていたと見ている（R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, pp.140-143.）。

（43） リムーザン＝ラモットは、そもそも伯を意味する言葉として、ラングドックにおいて一般的に用いられてきた*consul*の語が、一二世紀を通じて「参事 capitulaire」に代わる称号として「執政官 consul」に用いられる過程に、イタリア都市国家の影響を見ている（R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, p.112.）。また、マビーユによれば、中世において、*comes*・*dominus*・*consul*は、同じ意味で用いられており（*HGL*, t.III, p.246, n.6.）、その用例は、Du Cange, et al., *Glossarium mediæ et infimæ latinitatis*, t.2, Niort, 1883, p.527, n° 2. に見ることができる。

（44） « dominus Ramundus [……] comes Tolose [……] concessit [……] omni populo urbis Tolose et suburbii presenti et futuro, quod nunc et semper consules civitatis Tolose et suburbii deffendant et possint deffendere et custodire a malignis hominibus, raptoribus et latronibus domos videlicet ordinum et religionum et omnes homines et feminas ibi manentes et habitantes. Et quod semper similiter supradicti consules et omnes eorum successores deffendant et deffendere et custodire valeant itinera et strates et caminos ab omnibus malefactoribus et raptoribus et latronibus et ab omnibus aliis malignis et neffandis hominibus [……] Hoc actum fuit VIII die exitus mensis Septembris, feria VI^{a}, [……] anno M°CC°XX°II° ab incarnatione Domini. »

（45） クリネンによれば、一三世紀フランスは権力分立の概念とは無縁の時代であり、政治権力が司法権能と競合していたとされ、このように「法律 loi」と「正義＝裁判 justice」が不可分一体 inséparable の状態は、旧体制の終焉ま

で続いたとされる。J. Krynen, *L'état de justice : France, XIII^e-XX^e siècle*, t.1 : L'idéologie de la magistrature ancienne, Gallimard, 2009 [Krynen ②], pp.22 et 214.

(46) R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, p.158.

(47) P. Dognon, *Les institutions politiques et administratives du pays de Langudec*, Toulouse, 1895, pp.93-94.

(48) R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, pp.158-159.

(49) « Hec est carta de stabilimento, quod fecit commune consilium Tolose civitatis et suburbii, cum consilio domini Ramundi comitis Tolose [……] Facta carta anno M°C°L°II° ab incarnatione Domini. » (AA1/4) ; « Hec est carta de stabilimento quod fecit comune consilium urbis Tolose et suburbii, consilio Raimundi comitis Tolose [……] Facta carta anno M°C°L°II° ab incarnatione Domini. » (AA1/5)

(50) « Hoc est commune stabilimentum quod fecit dominus Raimundus, comes Tolose [……] cum consilio et communis consilii urbis Tolose et suburbii [……] Hoc fuit factum et confirmatum et statutum mense Augsti, feria IIII^a [……] anno ab incarnatione Domini M°C°LXXX°I°. » (AA1/6) ; « Hoc est commune stabilimentum quod fecit dominus Raimundus, comes Tolose [……] cum consilio capituli et communis consilii urbis Tolose et suburbii [……] Hoc fuit factum et confirmatum et statutum mense marcii, feria VI^a [……] anno ab incarnatione Domini M°C°LXXX°I°. » (AA1/7)

(51) « quod nullum pactum nec fedus faciam cum aliquo homine vel femina civitatis Tolose vel suburbii contra alium vel aliam causa rixe et seditionis, et si fecerim illud absolvo, et si carte inde erant facte, nullam deinceps habeant firmitatem, et si aliquis homo vel femina alium vel aliam interficeret, vel vulneraret, vel ignem mitteret, vel vineas, vel segetes, vel arbores scinderet, vel bestias interficeret, vel aliquod aliud maleficum, vel rixam, vel seditionem faceret in civitate, vel in suburbio, vel extra, alicui homini vel femine habitanti in eadem civitate vel suburbio, ero inde fidelis dominus et bonus iusticiator, et faciam inde illam iusticiam quam consules Tolose iudicaverint, vel alii probi homines Tolose si consules ibi non fuerint... » : 一一八九年一月六日付

(52) Mundy ②, p.66.

（53） « Hec est carta constitutionis publice, quam consules Tolose, tam civitatis quam suburbii, fecerunt cum comuni consilio civitatis et suburbii [……] mense Marcii, feria IIII[a] [……] anno ab incarnatione Domini MºCºLXXXXºIIº. » ここで執政官府は、自らの威光を増すために、ローマ法の勅令に由来する *constitutio* の語を導入したと考えられる。

（54） « in presentia domini Raimundi, tolosani comitis... » : 一一八〇年三月一一日付

（55） « cum consilio et voluntate domini Ramundi, comitis Tolose... » : 一一九九年三月六日付

（56） Mundy ②, p.95.

（57） R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, p.159.

（58） 以下の分析は、主として Mundy ②, pp.96-99. に依拠している。

（59） « capitutularii dixerunt iudicio ut carte ille comburerentur et delerentur et, mandato capituli, carte ille destructe et combuste fuerunt » : ここで、執政官府は当然のように夫婦関係書類の破棄を命じている。

（60） R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, p.172.

（61） *Ibid.*, p.173 ; 後掲註(76)参照。

（62） « Faciam justicam quam consules Tolose judicaverint vel alii probi homines Tolose si consules ibi non fuerint. » : G. Catel, *op.cit.*, p.216, Charte de Raymond VI en 1188.

（63） « in presencia Ramundi Monachi vicarii et curie jurate, scilicet Petri de Marcafava et Bernardi Petri de Cossano et Petri Rogerii et Ramundi Rotberti, qui tunc erant constituti judices. » : *HGL*, t.VIII, c.394.

（64） R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, p.172.

（65） 前掲註(51)参照。

（66） Mundy ②, p.98.

（67） « ut nullus homo iam aliquo tempore sit securus in hac villa, scilicet nec in civitate nec in suburbio, qui aliquem hominem vel feminam huius ville habeat captum vel redimere factum vel mortuum vel membris debilitatum vel depredatum vel raubatum, nec aliquis homo vel femina possit illi tali malefico securitatem vel

ducatum prestare nec illum ducare in hac villa, scilicet nec in civitate nec in suburbio, propter nupitas vel nullo alio modo absque consilio illius cui maleficium esset factum, nisi illa maleficia essent facta propter publicam guerram comitis vel hominum huius ville, de qua guerra esset facta transactio. »

(68) « si aliquis malefactor vel malefactrix facerit aliquam rapinam vel aliquod aliud malum alicui homini vel femine habitanti in hac villa Tolose, in civitate vel in suburbio, si tamen dominus comes Tolose illum malefactorem vel malefactricem non diffidaverat, ita quod esset guerra guerreiata, et dominus Tolose faciebat finem vel concordiam cum illo malefactore vel cum malefactrice, quod, post illam finem vel concordiam, ille vel illa qui illam rapinam vel iniuriam vel illud malefactum passus fuerit, possit illam rapinam vel iniuriam vel illud malefactum petere et requirere illi malefactori vel malefactrici vel illis quorum consilio illud factum fuerit, vel illis qui hoc facere fecerantur, et ab eis recuperare. »

(69) « omina malefacta que hominibus vel feminis huius ville Tolose facta fuerint, habitantibus in urbe vel suburbio, videlicet que malefacta dicuntur rescostanas, emendetur consulum cognitione. »

(70) « consules prohibent ne vicarius possit inquiere seu cognoscere super injuris et criminibus Tholose vel extra commissis »：*HGL*, t.VIII, c.1377.（一二五五年一二月付の覚書における執政官府の要望）

(71) « quod consules Tholose de usu antiquo et consuetudine Tholose audiebant et diffiniebant omnes causas criminum et injuriarum civium Tholose »：*HGL*, t.VIII, cc.1553-1554.（一二六五年頃の執政官府の請願）

(72) 王弟アルフォンスは一二五五年一二月付の覚書の中で、伯代官の裁判所における被告人の自白が執政官の前で繰り返されない限り無効であることについて、苦言を呈している。« De confecionibus accusatorum de crimine factis coram vicario, testibus etiam adibitibus, quas non admitunt nisi coram capitulo iterum confiteatur. »：*ibid*., c.1382.

(73) R. Limouzin-Lamothe, *op.cit*., p.173 ; Mundy ②, p.99.

(74) Cité par Mundy ②, Appendix V, Doc. n° 5, pp.197-199.

(75) 例えば、一一九九年には、伯代官ピエール・ロジェがトゥールーズ伯レモン六世の名の下に、ラ＝ドラード修道院長に対する訴えを執政官府の裁判所に持ち込んでいる。（AA1/22）

(76) 王弟アルフォンスは、不法行為や刑事事件が伯代官に係属しないことに不満を表明している：« De vicario quod non possit inquirere seu cognoscere super aliqua injuria vel crimine. »（*HGL*, t.VIII, c.1382.）

(77) « vicarius et capitulum iudicaverunt »（AA1/19：一一八〇年一一月付）；前掲註(63)（一一八九年五月付）；« in presentia Raimundi Monachi vicarii Tolose et curie iurate, in qua erant constituti iudices sub sacramento Bernardus Petrus de Cossa et Petrus de Marcafaba, et Petrus Rogerius et Raimundus Rotbertus erant advocati illius curie. »（前掲註(74)：一一八九年一一月付）

(78) Boutaric ②, p.228 ; Mundy ②, p.101.

(79) *HGL*, t.VII, p.204.

(80) Mundy ②, pp.143-144.

(81) 後掲註(113)下線部参照。

(82) *HGL*, t.VIII, cc.511-513.

(83) « Et quod cabalerii habeant tales jurices [……] et si de usu nec de alia re judices se discordaverint [……] scribant judices vel faciant scribere illud de quo discordaverint antequam inde recedant et persolvant scriptorem utraque pars communiter et petant consilium judices, scilicet unus de quaque parte cum consilio parcium, quibus partibus dicant prius hoc de quo discordaverint. Et si judices cum voluntate cabaleriorum concordaverint, quod petant consilium probis hominibus quod faciant sine pena. Tamen si aliquis noluerit quod consilium petatur consulibus cabaleriorum, quod judices petant consilium consulibus Tholose et ibi prius jurent quod hoc, quod inter se discordant, quod quisque putat dicere juste secundum sensum suum, et consules donent ibi eorum cognitionem et eorum judicium... »

(84) Cité par Mundy ②, Appendix V, Doc. n° 7, pp.199-202. 当判例においては、先ず原告・被告の間で都市の共通慣習法に関する主張の不一致に関して、トゥールーズ執政官府の助言を仰ぐべきことで判事たちの意見が一致、当時執政官でもあった二名の同僚にこれを任せている：« His rationibus hinc inde auditis et visis instrumentis ex utraque parte productis, predictus archidiaconus et predicti iudices concordaverunt inter se ut predictam causam

consilio capituli diffinierunt et consilium inde eis petere et, voluntate Raimundi Guilaberti et Atonis Isarni, fuit positum et concordatum quod Jordanus de Villanova et Petrus Raimundus Descalquencz peterent consilium a predicta causa capitulo et rationes et instrumenta monstrarent. »　その後、トゥールーズ執政官府は、原告・被告の主張のいずれが都市の共通慣習法であるかを決議して、これをサン＝セルナン副司教に伝えている：« Et isti viri capitularii, auditis rationibus et visis instrumentis et diligenter inspectis, cognoverunt pro seipsis et pro omnibus aliis eorum sociis [……] Hoc ita a predictis consulibus cognitio, Jordanus de Villanova et Petrus Raimundus Descalquencz dixerunt predicto archidiaconi ut assignaret diem Arnaldo Boverio et suis filiis et Petro Bonafos quod essent coram se cum aliis eorum iudicibus et quod audirent eorum iudicum. »

（85）　後の判例（一二四六年）において執政官府は、成文法と慣習法が相反する場合には、慣習法に従うべきことを定めている：« Est [……] consuetudo in hac civitate contraria, que juri scripto prevalet et est penitus observanda »：Arch. Nat., JJ.xxi, fol.83, cité par Ad. Tardif, *Le droit privé au XIII^e siècle d'après les coutumes de Toulouse et de Montpellier*, Paris, 1886, p.5.

（86）　R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, pp.160-161 ; Mundy ②, p.97.

（87）　« Hec omnia, ut predicta sunt, iudicaverunt consules, quod firmiter teneantur et observentur in perpetum, et quod a nemine possint removeri. » (AA1/20 et 21)

（88）　R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, pp.147-148.

（89）　例えば一二三〇年一一月には、伯裁判所の創設による伯の裁判権の回復が見られる：前掲註(39)参照。

（90）　A. Molinier, La commune de Toulouse et Philippe III, in *BEC*, t.XLIII, Paris, 1882 [Molinier ②], p.11.

（91）　Mundy ①, p.238.

（92）　*Ibid.*, p.240.

（93）　前掲註(37)参照。

（94）　前掲註(42)参照：但し、以下の通り任期に関しては、四～六年と証言にばらつきがある。

・**Guillelmus Amelii Cervinier**, civis Tholose：« hoc vidit de comite Raimundo filio, qui tenuit dictum

consularum per IIII^{or} annos... »（*HGL*, t.X, p.165.）

・**Petrus Bernardi Boaterii**, civis Tholose：« dixit quod dominus comes Raimundus, qui proxime decessit, posuit ipsum testem et Guillelmum de Setes et quosdam alios usque ad XII consules Tholose, qui fuerunt consules pro ipso et nomine ipsius per IIII^{or} annos... »（*ibid*., *loc.cit.*）

・**Bernardus Aymerici**（公証人）：« dixit quod vidit quod dictus dominus comes posuit per V vel VI annos, a pace Parisiensi citra, consules in Tholosa, qui nomine ipsius exercuerunt merum et mixtum imperium et omnem jurisdictionem, ita quod predicti consules nomine ipsius ferebant sententias et cognoscebant de causis civilibus et criminalibus. [……] dixit quod vidit quod consules qui tunc erant quendam hominem condempnaverunt ad mortem, quem ipse qui loquitur suspendi fecit pro ipso domino comite Raimundo. »（*ibid*., p.162：下線部著者）

・**Guillelmus de Setes**（元執政官）：« dixit quod vidit quod dominus Raimundus bone memorie, quondam comes Tholose, qui jacet apud Fontem Ebraudi, tenuit ad manum suam totum consulatum Tholose per sex annos pacifie et quiete »（*ibid*., p.164.）

（95） « dominus Raimundus, Dei gratia comes Tolose [……] gratis et bono suo animo et libera voluntate, recognovit, dixit et asseruit in veritate, quod totus consulatus Tolose urbis et suburbii erat et esse debebat in perpetuum in proprietatem et possessionem comunitatis et universitatis Tolose urbis et suburbii, presentis atque future, et quod ipsa sola communitas et universitas Tolose urbis et suburbii, presens et futura, nunc et in perpetuum, nullius viventis requisito consilio vel consensu, propria auctoritate et voluntate sua poterat et debebat eligere, nominare, instituere, creare, mutare, reducere, facere et tenere consules Tolosa, in urbe et suburbio [……] et quod quicquid idem dominus comes tenuerat in consulatu et consulibus Tolose urbis et suburbii, eligendo, nominando, instituendo, creando, mutando, reducendo, faciendo, vel alio modo, tenuerat ipse dominus comes nomine comande pro communitate et universitate et nomine communitatis et universitatis eiusdem urbis et suburbii Tolose et pro eis et quod idem dominus comes ibi nichil tenuerat pro ipso, nec tenuere debebat llo modo. »

（96） 前掲註(94)：公証人ベルナール・エムリの証言参照。

(97) « Notum sit quod Willelmus de Roaxio venit coram viris de Curia quam illustris dominus inclite recordationis Raimundus [……] et post ipsum Sicardus Alamani gerens vices in toto comitatu tolosano illustris domini Alfonsi [……] statuerant in Tolosa. » : V. Fons, Sentence inédite de la Cour du comte de Toulouse au XIII[e] siècle, *Recueil de l'Académie de législation de Toulouse*, t.XIX, 1870, pp.63-72.

(98) R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, pp.178 et 181. 公証人ベルナール・エムリの証言によれば、執政官府によって死刑判決を受けた者は、伯の立会の下での判決の読み上げを待って処刑されたとされる：前掲註(94)下線部参照。

(99) この点につき、モリニエは「レモン一族が伯の間は、宗主と臣民との間に相互の愛着で結ばれた真の関係があり、自治をめぐる抗争もそれ程長く険悪なものにならなかった」としている：Molinier ②, p.6.

(100) マンディの分析によれば、一二二七年五月一三日の都市条例（AA1/73）によって作成が義務付けられたトゥールーズ旧市街と新市街の記録台帳には、都市条例や通達、判決等が豊富に収録されており、それらはトゥールーズの自治特権獲得の指標となるものである。収録されている全一一一の証書のうち、一〇七の証書が一二三〇年以前のものとなっているが、体系的に整理されていないため、自治都市行政機構の解明には困難を極める。一一八九年～一二三〇年まで急速な発展期にあったトゥールーズの執政官府には、証書化された特権を制定法の形で成文化し、体系化することは考えられておらず、法として成文化・体系化された慣習上の諸特権が遵守されるべきだという認識は、ポワトゥー伯アルフォンスの時代以降に見られるものである。Mundy ②, pp.93-94 et 99.

(101) R. Limouzin-Lamothe, *op.cit.*, p.151.

(102) マンディによれば、王弟アルフォンスは典型的な北仏の中央集権的領邦君主であり、一二四九年～一二七一年までの二〇年あまりの統治期間のうち、実際に南仏所領に滞在したのは約一カ月に過ぎず、そのうちトゥールーズ滞在は、一二五一年五月二三日～二九日と一二七〇年四月二一日～三一日・五月一三日～一六日であり、ほとんどが死の直前、十字軍出征のためチュニス へ向け出発する際に集中している（Mundy ①, p.244）。

(103) « Licet in juribus nostris, prout multorum relatione didicimus, vos sepe reddideritis onerosos, nobis tamen non placet quod noster vicarius Tholose sine nostro specilai mandato vobis aliquam faciat novitatem. Cito tamen, favente Domino, certos nuntios nostros videbitis, qui vobis super confirmatione monete quam petitis, secundum

vestrum beneplacitum, taliter respondebunt, quod inde debitis esse contenti. Super aliis etiam que de segiatore et sustide monete ac aliis nobis scripsistis, vobis respondebimus per eosdem »：A. Molinier (éd.), *Correspondance administrative d'Alfonse de Poitiers*, 2 vols., Paris, 1894-1900 [Molinier ③], n° 2096.

（104） 当司法改革令の制定経緯と内容については、拙稿（前掲註(6)）を参照。

（105） *HGL*, t.VIII, cc.1370-1374.

（106） « quod prudentes viri magister Guillelmus Rolandi, canonicus Parisiensis, et Philippus de Aquabona miles, ad partes Tholosanas a domino Alfonso, illustri comite Pictavie et Tholose, super magnis et arduis negociis destinati, statum terre ad communem utilitatem in melius reformare volentes et jura domini comitis conservare illesa, consulibus Tholosanis plures articulos amicabiliter proposuerunt ex parte domini comitis, in quibus et equitas ledi et juribus domini comitis detrahi videbatur, postulantes nomine domini comitis dictos articulos emendari, nisi aliquod rationabile proponere vellent, propter quod ipsi deberent desistere a postulatione predicta. Et ut deliberandi haberent copiam pleniorem, in scriptis dictos eis articulos tradiderunt. »

（107） « Ad hec predicti consules, deliberatione prehabita, ad singulos articulos respoderunt, paucos ex eis admittens, et pro majori parte super majoribus et carioribus articulos monitis corum condescendere noluerunt, pretendentes excusationes suas per libertates et consuetudines suas sic obtinuisse temporibus reactis. »

（108） « Sane post diversas et varias altercationes, prefati nuncii domini comitis, manifestis racionibus adherentes et cum omni mansuetudine procedere volentes, requisiverunt a predictis consulibus ut consuetudines, quas super hiis se habere dicebent, eis ostenderent et responsiones suas in scriptis redderent, ne resposionibus eorum aliquid addi posset vel detrhai, et ne super eis aliquid posset in dubium revocari. Volentes insuper dilectionis affectum, quem habent ad cives Tholosanos, apercius demonstrare et eis gratiam domini comitis conservare, obtulerunt eisdem, quod super predictis questionibus et articulis parati erant stare, de plano et sine strepitu judicii et absque forma compromissi, cognicioni et consilio venerabilis patris domini episcopi Tholosani, Sycardi Alemani et Pncii Astoaudi, vel si magis eis placeret... »

(109) « Tandem sepedicti consules, habito consilio et satis prolixa deliberacione precedenti, finaliter respoderunt, quod nichil super predictis articulis inmutarent, nec, quantum in eis erat, permitterent inmutari nec responsiones suas in scriptis traderent nec cognitioni seu consilio alicujus super predictis se committerent nec etiam super hiis coram aliquo dicputarent, nec consuetudines ostendere voluerunt, occasiones suas, sicut eis placuit, pretendentes et ad sui excusationem proponentes, quod cum » dominum comitem ad partes istas venire continget, coram ipso raciones suas proponent et ipsum affectuose rogabunt, ut omnes consuetudines, quas habent super predictis articulis et aliis, eis confirmet et eciam ampliores concedat » ; « quod cum anno Domini M° CC° L° quinto, III° nonas junii, ad requisitionem et preces venerabilium consulum Tholose, in domo communi ejusdem civitatis multi boni viri convenissent [……] pro ipsis consulibus et pro aliis Tholosanis taliter reponsuri, quod ipsi et civitas Tholose bonas habeant consuetudines et longevas, consessas et obtentas successive a pluribus dominis Tholose, quas volebant sine diminutione et immutatione tenere, sicut consueverant, et servare, sperantes et firmiter confidentes, quod dominus comes Tholose in adventu suo super his et pluribus aliis audiet et exaudiet ipsorum supplicationem et preces, et propter hoc nolebant predictas consuetudines coram aliquibus personis in questionem seu disputationem deducere, neque super eisdem consuetudinibus volebant subire cognitionem seu arbitrium predictorum domini episcopi Tholosani et Sicardi Alamani et Poncii Astoaudi vel quorumlibet aliorum, secundum quod ut tangebatur super premissis ex parte predictorum magistri Guillelmi Rollandi et domini Philipi fuerat presentatum. »

(110) Molinier ①, p.562.

(111) *HGL*, t.VIII, cc.1375-1378.

(112) « Item quando delicta conmittuntur inter civem Tholosanum et aliquem extraneum extra Tholosam vel ejus territorium aut tenementum, aut in diocesibus Agennensi, Caturcensi vel alibi in omni terra comitatus Tholosani, consules volunt de hoc cognoscere et super illis delinquentes punire, etiam contra inhibitionem senescalli domini comitis, nec permittunt quod puniantur ubi delinquerunt (*sic*) vel quod senescallus domini comitis aut locum

ejusdem comitis tenens de hoc cognoscat, quanquam conventus coram dicto senescallo aut curia domini comitis velit et offerat stare juri. »

(113) « Item quando querimonie proponuntur coram vicario domini comitis apud Tholosam, locum domini comitis ibidem tenere, litigantes aut alter ipsorum sine auctoritate et consensu vicarii et judicis sive etiam contra eorum inhibitionem expressam constituunt sive eligunt sibi judices, scilicet quemdam pelliparium, sutorem aut quamlibet vilem personam et imperitam de villa Tolose... » (下線部著者)

(114) « ..., et jurisdicionem domini comitis deludentes, nolunt in curia ejusdem comitis respondere, et consules interdixerunt advocatis Tholosanis ne prestent patrocinium in curia dicti vicarii, nisi coram judicibus in forma predicta a litigatoribus vel eorum altero sic constitutis vel electis. Item consules interdixerunt advocatis Tholosanis, ne prestent patrocinium hominibus extraneis, sive sint de terra domini comitis sive de aliis terris, contra civem Tholosanum, super injuria vel violencia aut alio maleficio conquerentem. »

(115) « Item consules prohibent ne vicarius possit inquiere seu cognoscere super injuriis et criminibus Tholose vel extra commissis. [……] Item consules confessiones et recognitiones in judico factas coram vicario domini comitis reputant nullas esse, et dicunt quod nullum afferunt prejudicium confessis aut recognoscentibus, licet de ipsis confessionibus et recognitionibus constet per scripturam publici notarii curie domini comitis vel per ydoneos testes. »

(116) « Item consules non permittunt, quod vicarius intersit inquisitionibus, quas ipsi faciunt super criminibus, cum bona delinquentium domino comiti debent incidere in incursum, et sic privatur plerumque dominus comes jure suo. »

(117) « Item consules non permittunt, quod ad dominum comitem ab eorum sentenciis appelatur, nec ipsas appellationes recipierent, quascumque contra sentenciam rationabiliter a gravato, contra quem fertur sentencia, possit opponi. »

(118) *Ibid.*, cc.1384-1389.

(119) « Sicunt bone consuetudines in singulis regionibus sunt servande, sic male adinvente penitus abolende, ad quas in defensionem longinqui temporis nec sufficit usus nec proficit, qui quanto prolixior, tanto pernitiosior eliminandus est potius quam fovendus. Nos sane, qui nostrorum jura fidelium sic firma volumus observari, ut nostra minime negligere videatur, vos dudum et sepius per sollempnes nuncios nostros monuimus ut ea, que in nostram et nostrorum subditorum injuriam aub colore consuetudinis in usum, vel predecessoris nostri temporibus redegistis, salubriori dimitteretis consilio, quod tamen hactenus facere noluistis, licet articuli sigillatim per eosdem nuncios vobis expressi fuerint, quos homines tanti consilii, quanti vos esse credimus, nec decebat defendere nec tenere. Verum tam evidens nostri domini prejudicium in divinam cedens injuriam et enormem nostrorum fidelium lesionem, ulterius sustinere cum bona conscientia non valentes, longa satis deliberatione prehabita et multorum communiatio consilio sapientum et virorum Deum timentium, ea que per vos corrigere noluistis, auctoritate nostra duximus ad statum debitum reducenda. »

(120) « Porro quod vobis mirabili privilegio vendicatis, latas scilicet in curia vestra sententias esse tante dignitatis et poderis ut ab eis nequeat appellari, juste et rationabiliter confutamus, districtissime vobis mandates, quatinus appellationibus omnibus deferatis, quas ad nos interponi contigerit a curie vestre sentenciis, in casibus a jure concessis nec eisdem pendentibus aliquid innovetis, nec appellantes aliquatenus offendatis, nec appellare volentes minis vel terroribus apertis vel clandestinis retrahatis. »

(121) « Preterea, cum bone memorie R., quodam comes Tholose predecessor noster, tempore quo decessit esset in possessione vel quasi ponendi consules in civitate Tholosana, de qua possessione nos spoliastis minus juste, volumus et recipimus ipsam possessionem nobis restitui indilate »：ここでは、占有回復に関する教会法上の原則たる、*spoliatus ante omnia restituendus* の法格言が援用されている。

(122) « quod quando dominus comes mittit litteras de credentia vel alias per aliquos bonos viros universitati vel consilio generali Tholose, nunquam illi nuncii possunt suam credentiam dicere consilio vel universitati vel litteras suas ostendere, donec omnia solis consulibus revelaverint, et tunc postea consules loquuntur quibus volunt et

subornant eos, taliter quod nichil respondetur nisi quod ipsi dictant. »

(123) *Ibid.*, cc.1553-1556.

(124) « Quod dicta universitas urbis et suburbii Tholose ad manum suam habeat et possidebat capitulatum vel consulatum dicte urbis, et ex parte dicte universitatis seu communitatis dicte urbis et suburbii capitularii vel consules, qui ex parte docte communitatis uebis et suburbii in dicta urbe et suburbio pro tempore fuerant, circa finem sue administrationis annuatim alios capitularios vel consules de eadem urbe et suburbio eligebant et creabant et nominabant et instituebant, et eadem communitas sic institutos, creatos, electos vel nominatos pro consulibus tenebat et habebat. »

(125) « Item quod vicarius, quicumque erat Tholose, tempore sue novitatis seu ingressus sui officii, jurabat et jurare tenebatur, et sic erat consuetum et usitatum longissimis temporibus, ibidem dictis consulibus forciam et consilium, et quod universos et singulos dicte urbis teneretur deffendere et protegere intus civitatem et suburbium et extra in omni loco pro posse suo in personis et rebus eorumdem, et quod vicarius se tornabat specialiter et tornare debebat seu desistebat et desistere debebat cognicioni consulum ab omni forcia et violencia et injuria, si quam faciebat vel fecerat civibus Tholose et alicui eorumdem, et emendam inde faciebat cognicioni consulum eorumdem. »

(126) « Item quod consules Tholose de usu antiquo et consuetudine Tholose audiebant et diffiniebant omnes causas criminum et injuriarum civium Tholose. »

(127) « Item dicunt et asserunt dicti capitularii seu consules de consilio dictorum consiliatorum, quod si de consuetudine dubitetur inter cives vel inter cives et forenses super contractibus, in dicta urbe seu suburbio inhitis in causis vel negociis, quod stetur dicto consulum predictorum et quod super dicta consuetudine et usu dicti consules, qui pro tempore fuerint, cum juraverunt in ingressu sue administrationis dicti consules, requirantur et quod suum prestitum juramentum in ingressu super dictis consuetudinibus sufficiat. »

(128) *Ibid.*, cc.1556-1559.

(129) « Item ad peticionem, quam faciunt super electione consulum, responsio [……] Pluries autem facta est electio

consulum per dominum comitem. Et eo tempore quo dominus Raimundus comes bone memorie migravit a seculo, ipse creaverat consules qui juxta morem Tholose debebant regere villam per unum annum. Et post obitum dicti domini comitis cives Tholosani consules creatos per dictum comitem expulerunt violenter de consulatu et de domo communi bene per dimidium annum ante finem sui regiminis, et privaverunt indebite dominum comitem, qui nunc est, sua possessione vel quasi in qua erat ex facto sui predecessoris, propter quod dictus comes fuit restitutus ad illam possessionem. Unde sicut spoliatio fuit injusta, sic debet restitutio justa dici, et dicta restitutio cum magno consilio fuit facta, sicut continentur in ordinatione facta per dominum Guidonem Fulcodii, nunc papam, apud Vaurum de mandato domini Regis et domini comitis recitata »：ﾘﾘﾘでぁ *spoliatus ante omnia restituendus* の法格言が援用されている（前掲註(121)参照）。

(130) « Item super articulo de quo dicitur esse factum per dominum comitem bone memorie publicum instrumentum super recognicione consulatus, quem dicunt pertinere ad communitatem ville Tholose, responsio：Non creditur quod dictum instrumentum de consciencia domini comitis bone memorie fuerit factum, sicut in petitione consulum continentur, nec in dicto instrumento sigillum prefati domini est appensum »：前掲註(95)参照。

(131) « Item responsio super juramento vicarii. Verum est quod de patiencia domini comitis bone memorie juraverunt vicarii consulibus sub certa forma, que scripta poterit inveniri, et etiam tempore domini comitis qui nunc est aliquis vicarius dicitur jurasse. Set totum istud dependet de voluntate domini comitis, quod ex eo apparet quia vicarius preest consulibus secundum ordinationem factam cum magno consilio a domino comite, secundum quam ordinationem a sententiis consulum ad vicarium appellatur. Et esset ista petitio contraria ordinationi predicte et litteris domini comitis patentibus, super hoc destinatis per dominum Guidonem Fulcodii nunc papam et alios nucios »：前掲註(120)参照。

(132) « Item responsio super articulo de audientia criminum, quod si consules audiebant querimonias criminum et diffiebant, hoc erat de patientia domini comitis. Et quia cogniciones et deffiniciones eorum quandoque finem debitum non habebant, fuit ordinatum per dominum comitem, ut conquerentes super criminibus juxta electionem

conquerentium tam a vicario quam a consulibus audirentur, ad hoc ut contra malefactores plenius justicia redderetur. »

(133) « Item super articulo de consuetudinibus dubitatis responsio : Faciat consules in scriptis peticionem istam clarius et specialiter et dominus comes habebit consilium. Et si ipsi super hoc volunt habere specialem gratiam, petant in scriptis, dominus comes habebit consilium. »

(134) A. Fliche, *op.cit.*, p.97.

(135) 前掲註(100)参照。

(136) これら三名の人物誌については、Fournier et Guébin, *Enquêtes administratives d'Alfonse de Poitiers*, Paris, 1959, pp.XXVII-XXVIII（ギー・フーコワ：伯の法律顧問）；XLIII（ポンス・アストー：レモン七世の大法官）；LXXXII-LXXXV（シカール・アラマン：レモン七世の総督）に詳しい。

(137) Mundy ①, pp.244-245.

(138) Boutaric ①, pp.9-11.

(139) *HGL*, t.VIII, cc.1409-1410. マンディは、これを旧来の寡頭政下での裁判における素人主義の弱体化と法の専門職化を示すものであり、こうした法の専門職化は、悪しきエリート主義の側面が見られるものの、中流以下の人々には概ね好都合であったと分析している：Mundy ①, p.258.

(140) *HGL*, t.VIII, cc.1651-1653.

(141) « Item quod in partibus Tholosanis constitueretur aliqua bona persona, que audiret et sinedebito terminaret omnes causas appellationum interpositarum ad dominum comitem, quia pretextu dictarum appellationum jura domini comitis et litigancium retardantur. »

(142) Cité par Mundy ①, pp.249 et 260：マンディの分析によれば、トゥールーズ市古文書館所蔵の当該写本には日付がないが、一二七〇年代前半のものであることは確実であるとされる。

(143) « consules Tholose pro suis temporibus fuerunt electi per vicarium Tholose et curiam domini Alfonsi comitis Tholose et sunt in consulatu Tholose officiales domini comitis. »

（144） « super multis actionibus coram domino vicario Tholose vel eius iudice tanquam coram ordinario... »

（145） *HGL*, t.VIII, cc.1514-1519.

（146） « Derechief de la forme du serement, que li viguier de Tholose deit fere aus conses et aux citaiens de Tholose, et que la forme seit aportée au Parlement de Touzsainz, mesire Ponz Astouaut, requis sur cele forme, dist que li n'i ot point de serement puis que Odart de Ponpagne fust vigier. »

（147） マテュヴァ某は、プラロンにあるサン＝セルナン教会所有地付近およびフォンマルサンの土地を姉妹と共に四〇年以上所有しており、当該権利が認められない場合には、代官あるいは国王に上訴すると言って執政官府を脅している：« ex tunc ad dictum dominum vicarium vel ad dictum regem Francie appellamus in scriptis... »（E569 判決）cité par J. H. Mundy, *Men and Women at Toulouse in the Age of the Cathars*, PIMS, Tronto, 1990, p.185.

（148） 例えば、一二六八年五月一日付の王弟アルフォンスによる伯代官宛通達では、執政官に選出されたギョーム・ソーリが選挙人団に対する就任辞退のとりなしを伯に求めていることからも、執政官職自体の権威の失墜が窺える：« Alfonsus, *etc*., dilecto et fideli suo vicario Tholose salutem et dilectionem [……] vobis mandamus quatinus eos, ad quos spectat consulatus seu capitulatus Tholose electio, ydoneis persuasionibus inducere curetis, ut dictum Guillelmum [……] absolvant nec eum suscipere compellant, nisi libens voluerit, officium consulatus. »（*HGL*, t.VIII, c.1614.）

（149） « Super cognitione et judicio criminum de quibus ipsi consules vice nostra ac nomine nostri cognitionem et judicium habeant Tholosae et infra terminus, de quibus erant in possessione pacifia cognoscendi et judicandi » ; *Ordonnances des rois de France de la troisième race*, t.2, Paris, 1729, p.109.

（150） Boutaric ①, pp.9-11.

（151） Mundy ①, pp.244-245.

（152） 以下の分析は、主として Krynen ①, pp.391-399. に依拠している。

（153） « rtetenta nobis plenitudine regie potestatis declarandi, mutandi, vel eciam corrigendi, addendi vel minuendi » : *HGL*, t.VIII, c.1352.

（154） « secundum plenitudine potestatis de iure possumus supra ius dispesare » : Richter (éd.), *Corpus juris canonici*, pars II : Decretalium collectiones, Leipzig, 1839, c.471.

（155） J. A. Cantini, De Autonomia Judicis Saecularis et de Romani Pontificis Plenitudine Potestatis in Temporalibus Secundum Innocentium IV, in *Salesianum*, 23 (1961), pp.407-480.

（156） J. A. Watt, The use of the term “plenitudo potestatis” by Hostiensis, in *Proceedings of the Second International Congress of Medieval Canon Law*, S. Kuttner et J. J. Ryan (eds.), Città del Vaticano, pp.161-187.

（157） « et aliquoties ratificat et supplet papa de plenitudine potestatis, si quis defectus est ; hac clausula saepe utitur dominus noster », in *ibid*., Extract 3 (on X.1.6.13), p.178.

（158） シフォローは、これらの法文を「一三世紀の（神聖ローマ）帝国とフランスにおいて、唯一君主権を定義するアルファでありオメガである」としている：J. Chiffoleau, *art.cit*., p.15.

（159） 前掲註（153）における、「これを宣言し、変更し、あるいは修正し、付け加え、縮減する declarandi, mutandi, vel eciam corrigendi, addendi vel minuendi」という表現は、有名なボローニャ四博士の逸話における「汝は生ける法 lex viva たり。汝は法を与え、廃止し、制定する dare, solvere, condere leges ことを得。［……］汝は魂ある法 lex animata、その意思によって万物を導く」（cité par L. Mayali, « Lex animata », *Renaissnace du pouvoir législatif et genèse de l’État*, A. Rigaudières et A. Gouron dir., Montpellier, 1987, p.155.）という、新勅法（N.105.2.4）に基づく「唯一の立法者 solus conditor legis」にして「生ける法 lex animata」たる「ローマ皇帝の絶対権」と「地上における神の代理人」たる「教皇の完全なる権力」を結びつけたものとして理解される。クリネンは、当該司法改革令の文言を中世ローマ法学によって再発見された、「唯一の立法者にして法律解釈者たる皇帝」という帝政後期の皇帝像に基づく立法絶対主義の表れと評価している：Krynen ②, p.158.

（160） 以下の分析は、主として Krynen ①, pp.408-411 ; Krynen ②, p.22 に依拠している。

（161） P. Michaud-Quantin, *« Universitas ». Expressions du mouvement communautaire dans le Moyen Âge latin*, Paris, 1970, pp.305-306.

（162） その際の権力の「委任 mandatum」は、ローマ＝カノン法上の手続きである “procuratio” に基づいて行われ、

「代理人（代行官）procurator ; auctor ; nuncius」は、当該委任の目的・期間・任地・作成の日付が明記された委任状 instrumentum によって指定される。こうした委任は「特別 speciale」・「包括 generale」のどちらでも可能であり、後者の場合には、「完全なる権力 plena potestas」と「自由かつ包括的な管理運営 libera et generalis administratio」権能が与えられる：Krynen ②, pp.67-68.

（163） Krynen ①, p.408.

（164） Gent de France, mult estes esbahie !
Je di à touz ceus qui sont nez des fiez :
Si m'aït Dex, franc n'estes vous mès mie ;
Mult vous a l'en de franchise esloigniez,
Car vous estes par enqueste jugiez.
Quant deffense ne vos puet faire aïe
Trop iestes cruelment enginaniez,
A touz pri.
Douce France n'apiaut l'en plus ensi,
Ançois ait non le païs aus sougiez,
Une terre acuvertie,
Le raigne as desconseilliez,
Qui en maint cas sont forciez.

— Chanson sur les Établissements du roi Saint-Louis：1260-1270, in Leroux de Lincy (éd.), *Recueil de chants historiques français depuis XII^e^ au XVIII^e^ siècle*, 1^ère^ série, Paris, 1841, p.218, couplet 1. 編者のルルー＝ド＝ランシーは、この詩の成立を一二七〇年頃としたうえで、無名の封建領主（それも国王ルイ九世縁の者）の手になるものと推定している：*ibid.*, p.216.

（165） ルゴフによれば、このギベール・ド・トゥルネなる人物については、ほとんど何も知られていないが、パリ大

学において学生・教師であった時期があること、所属するフランシスコ会において知的な名士のひとりとして知られていたことが分かっており、恐らくルイ九世の十字軍遠征に従軍し、その際王と結んだ友誼が縁で『王侯教育論』（A. de Poorter (éd), *Le traité Eruditio regum et principum de Guibert de Tournai, O. F. M., in Philosophes Belges: Textes et Études*, t.9, Louvain, 1914.）を著したと推定される：J. Le Goff, *op.cit.*, Paris, 1996, pp.409-417. この論文は、ルイ九世宛の三通の書簡から構成され、最後の書簡の日付（« Actum Parisius, apud fratres minores, anno gratiae M° CC° quinquagesio nono, mense Octobri, in die octabarum beati Francisci »：éd. de Poorter, p.91.）から、一二五九年一一月一一日にパリで書き上げられたことが分かる。これら三通の書簡においては、『皇帝トラヤヌスの教え』に倣って君主に必要な四原則：①神への尊崇 reverentia Dei、②自律 diligentia sui sui、③権力者や属僚の規律 disciplina debita potestatum et officialium、④臣下への愛情と保護 affectus et protectio subditorum、が扱われている。このうち、③の原則が第二書簡 第一部（*In qua agitur de disciplina debita potestatum et officialium*, éd. de Poorter, p.43 s.）で扱われている：éd. de Poorter, p.X.

(166) « Legum sanctitas violatur, consuetudines inducuntur, cives pro voluntatis arbitrio statuenda dictant, dictata convelunt, innocentes dampnant, reos absolvunt. Sed vae eis qui condunt leges iniquas et scribentes injustitiam, veritatis legem evacuant vel evacuari permittunt ! [……] Nam etsi princeps esse dicatur legis nexibus absolutus, non hoc est quia sibi quod iniquum est liceat, sed quoniam is esse debet qui non timore poenae sed amore justitiae aequitatem colat, rei publicae serviat utilitati, et in omnibus aliorum commoda privatae praeferat voluntati. Non est enim potentis pro libito saevire in subditos, sed pro qualitate factorum innocentes absolvere et punire reos. Et si negotiis publicis nihil liceat principi nisi quod lex aut aequitas persuaserit, aut ratio communis utilitatis induxit, certum est ejus subditis nil licere nisi quod de judicii prodierit aequitate, sicunt scriptum est. [……] Imo si minor in majorem non habet imperium, nihil est humana constitutio quae non sequitur jus divinum. »（下線部著者）：éd. de Poorter, pp.47-48.

(167) ディッキンソンの分析によれば、一一五九年に完成された本書は、王権イデオロギーに強固な基礎を与えたという点において、一二世紀末～一三世紀初頭の中世政治学に画期をもたらす重要な著作であり、その影響力は一六世紀

中頃にまで及んだとされる：J. Dickinson, The Mediaeval Conception of Kingship and Some of Its Limitations, as Developed in the *Policraticus* of John of Salisbury, in *Speculum*, t.1-3 (1926), pp.308-337. また、一三世紀～一四世紀における王権理論の進展については、L. K. Born, The Perfect Prince: A Study in Thirteenth- and Fourteenth-Century Ideals, in *ibid*., t.3-4 (1928), pp.470-504. に詳しい。

(168) « Princeps tamen legis nexibus dicitur absolutus, non quia ei iniqua est liceant, sed quia is esse debet, qui non timore penae sed amore iustitiae aequitatem colat, rei publicae procuret utilitatem, et in omnibus aliorum commoda priuatae praeferat uoluntati » : C. Webb (éd.), *Ioannis Saresberiensis episcopi Carnotensis Policratici*, t.1, Oxford, 1909, p.238. 前掲註(166)および後掲註(172)下線部参照。

(169) « Digna vox maiestate regnantis legibus alligatum se principem profiteri : adeo de auctoritate iuris nostra pendet auctoritas. Et re vera maius imperio est submittere legibus principatum. Et oraculo praesentis edicti quod nobis licere non patimur indicamus. »

(170) ルイ九世の息子フィリップ（後のフィリップ三世）の養育係として、当時国王の「政治アカデミー」の中心となっていたドミニコ会士による君主鑑編纂の流れを汲む『王子教育論 De eruditione filiorum regalium』を著す傍ら、『自然鑑 Speculum Naturale』・『学問鑑 Speculum Doctrinale』・『歴史鑑 Speculum Historiale』の百科全書三部作をルイ九世に献呈している。『学問鑑』全一七巻のうち、第四～一〇巻が倫理学・経営学・政治学・法律学にあてられている：清瀬卓「『鑑』（スペクルム）―中世百科全書研究ノート―」イタリア学会誌(31)、一九八二年、一一一～一一四頁；J. Le Goff, *op.cit*., pp.407-409.

(171) L. K. Born, *art. cit*., p.479, n.1 ; éd. de Poorter, p.X.

(172) « Publicanus, inquit, est caput rapinae, lex violentiae, praedo sine pudore, medicus exterminij, immanior furibus. Nam fur timens delinquit, hic quicquid fecerit legem vocat. Quis eo iniquior, qui verbis iustitiae iustitiam damnat, et armis innocentiae spoliat, vulnerat, occidit innocentes ? [……] Officiali Caesaris nisi in omnibus acquieueris, Caesari contradices ; et quicquid dicit, nisi sit sic, et nisi sic stet, est in personam regis, contraque coronam. [……] concutientibus officialibus, spoliatibus, torquentibus, mutire non licet. Haec autem omnia in

principem redundant. [……] Princeps autem legis nexibus dicitur absolutus, non quia iniqua ei liceant, sed quia is esse dabet, qui non timore poenae, sed amore iustitiae aequitatem colat. Nam in negotijs publicis nil ei velle lecet, nisi quod lex aut aequitas persuadet, aut ratio communis vtilitatis inducit »（下線部著者）：Vincent de Beauvias, *Speculum doctrinale*, in *Bibliotheca mundi. Speculum quadruplex : naturale, doctrinale, morale, historiale*, t.II, Douai, 1624, cc.572-573.

（173） Krynen ①, p.408.

（174） 伝統的な裁判権者としての国王の属性の重要性に関する通説的見解については、Fr. Olivier-Martin, *Histoire du droit français des origines à la Révolution*, Paris, 1948, n° 68, pp.100-101. を参照。また、ルイ九世による、このような伝統的属性の実践については、*Id.*, Saint Louis, in *Hommes d'État*, Duff et Galy (dir.), t.2, Paris, 1937, pp.165-171. に詳しい。

（175） Ch. T. Wood, *op.cit.*, p.73.

（176） Fr. Olivier-Martin, *op.cit.*, n° 234, pp.300-301：国王は自ら臣従礼を行う代わりに、「代理官 procureur」を派遣する。

（177） A. Teulet, *Layettes du Trésor des Chartes*, t.2, Paris, 1866, p.660.

（178） Cité par E. Boutaric, Rapport sur une communication de M. Beauchet-Filleau, *Revue des sociétés savantes*, 4e série, t.4, Paris, 1866, p.445 ; 前掲註(176)参照。

（179） Ch. T. Wood, *op.cit.*, pp.74-75.

（180） « secundum quod per karissimum dominum fratrem nostrum regem Francorum in eadem diocesi in casu consimili observatur »：*HGL*, t.VIII, c.1714.

（181） « secundum quod [gentes] domini regis Francie utuntur in partibus illis in casu consimili »：Molinier ③, n° 1586.

（182） Ch. T. Wood, *op.cit.*, pp.92 et 95-96.

（183） *Ibid.*, pp.98-99.